「農民詩人」　濱地輝武氏個人誌
「詩壇消息」　府下雜司ヶ谷其社
「躍動時代」　演劇、映畫、舞踊の研究
　四谷南伊賀町十六
「光線」　早大文學部同人誌光線社
「新映畫」　牛込袋町映光社
「皮と肉」　下谷仲御徒東京六連報社
「ユーモア」　日本漫畫家聯盟の機關
　誌目黑町同本部
「教育畫報」　牛込納戸町教育文化普
　及會
「人と太陽」　京橋銀座親陽會出版部
「美教と生活」四谷愛住町美教準備社

〔昭和二年一月〕

「ロシヤ文學」　昇、松古、尾瀨三氏に
　より名古屋市東區下飯田其社
「勞働運動」本鄕駒込片町勞働運動社
「經濟時代」　府下長崎町經濟時代社
「文藝公論」　橋爪健氏編輯其社
「黑潮」　新小說廢刊に換へて春陽堂
「カメラマン」「カメラ」の姉妹誌小
　石川區表町アルス
「郁市と郊外」　府下洗足其社
「詩文學」　赤坂青山北町中外文藝社
「甕」　早大文藝部學生同人誌
「待望」　尾崎喜八氏個人誌市外上高
　井戸字原
「詩人」　西巢鴨堀の內八六其社
「鐘」　立教大學を背景として
「詩人時代」　下谷區其社
「花畑」　詩誌赤阪新坂町十二其他
「文藝解放」　萩原、麻生、飯田氏等同
　人市外世田ヶ谷代田三一八其社
「新興宗教」　奈良丹波市町其社
「マキノプロダクション」　芝愛宕下
　町映畫世界社
「カルチュア」　京橋南紺屋町實業ビ
　ル大日本國民健康增進會
「動物世界」子供雜誌府下巢鴨三成社
「尋常二年優等生」　巢鴨町一博英社
「尋常三年優等生」　下澁谷宏文社
「一年の友」

〔二月〕

「社會科學研究」　末弘、吉野、小泉、
　高田、高橋、上田、永井氏等同人年
　四回日本評論社
「ゆもりすと」　生方敏郎氏の評論誌
　小石川區音羽町三ノ二一其社
「生きて行く道」　石丸梧平氏千葉市
　寒川人生創造社
「日活時代」　京都市島原口西入ミノ
　ルストーア
「映畫の花」芝日蔭町映畫タイムス社
「百美人」　深川區富岡門前町紅春社
「創作月刊」　無名作家發表誌文藝春
　秋社
「陰陽師」　サトウ・ハチロー他三氏
　の同人詩文誌
「昭和川柳」　四谷區寺町六關東川柳
　聯盟
「作品」　市外中野町三七九三其社
「雪」　帝大文學部學生によつて

〔三月〕

「教育新潮」　小石川日本教育學會
「子どもの創作」千葉寒川人生創造社
「家庭と科學」　牛込横寺町家庭科學
　普及會
「評判」　澤田氏政界進出の一歩とし
　て千駄ヶ谷原宿日本評判社
「海外」　支那問題研究誌落合町其社
「海外之日本」海外案內誌丸ビル其社
「展望」　神近市子鈴木厚氏個人雜誌
「河」　宮崎丈二氏大井町原五三八二
「黑林」九州詩人協會福岡市東花園町
「演劇藝術」早稻田鶴卷町二二三其社
「手帖」　麴町區幸ビル文藝春秋社
「漫畫の國」　服部亮英氏編輯聚芳閣
「靜坐」　京都東山通松原其社

〔四月〕

「大調和」　武者小路氏編輯春秋社
「社會學徒」　圓谷弘氏編輯神田南甲
　賀町十二其社
「左翼文藝」　水野、須田氏等によつ
　て雜司ヶ谷其社
「青山文學」　青山學院文藝部
「創造日本」　日本大學出版部內其社
「大名行列」　巢鴨堀の內四四大道藝
　術社
「家事及裁縫」　牛込榎町東京家事講
　習所
「財界」　麴町丸ビル財界社
「河部畫報」　大阪西區江戸堀其社
「ドイッチ」　本鄕區東竹町日獨書院
「受驗小學生」　牛込矢來町大正書院
「二年の友」　下澁谷宏文社
「モハン三年」「モハン四年」　「模
範五年」「模範六年」　以上、小石
　川關口台町模範社
「模範二年」　本鄕春木町學友社
「小學一年生教育」　「小學二年生教
　育」「小學三年生教育」「小學四
　年生教育」「小學五年生教育」「小
　學六年生教育」　以上、神田神保町
　小學館

〔五月〕

「國史研究」　京都帝大を中心として
　京都下長者町文獻書院
「春秋」　政治經濟文藝の綜合雜誌小
　石川白山御殿山其社
「文化批判」　雜司ヶ谷文化批判社
「維新」　神道の研究誌京橋區新橋博
　品館內其社
「演劇藝術」　牛込赤城下町其社
「健樂學研究」　京都上京區丸太町星
　野書店
「三味と踊」　日本橋本石町邦誇社
「社會詩人」　コムミニスト詩人機關
　誌として市外野方町其社
「詩學」　南江氏他十氏同人
「塊」　文藝誌淺草榮久町二九

〔六月〕

「音樂界」　音樂研究誌府下寺島其社
「キネマと文藝」　神奈川茅ヶ崎日本
　キネマ研究會
「商業英語」　横濱市寄木町其社
「富士山」　井東憲氏他靜岡縣出身十
　五氏同人で其社
「武教」　京都上京區吉田日本武教社

〔七月〕

「號外」　東京記者聯盟にて麴町內幸
　町三幸ビル號外發行所
「旅行いろは引案內」　神田小川町大
　東社
「詩歌隨筆」　大關五郎松村又一編輯
　にて市外中野西町春風社
「プタレタリア藝術」　日本プロレタ
　リア藝術聯盟機關誌として市外淀
　橋角筈八六日本プロレタリヤ藝術
　聯盟
「創作評論」　森本巖夫氏編輯
「新文學」　廣島高師寮五十一號室
「劇」　京橋區西紺屋町其社
「文藝塔」　小石川區大塚仲町四一大
　衆文藝研究會

〔八　月〕

「家政と醫學」神田西紅梅町大東書院
「性論」　麹町區內幸町其社
「農村往來」　麹町有樂町農政研究會
「科學新潮」　興味本位牛込紅城社
「塔影」　麹町下六番町俳句普及會
「羅列」　市外阿佐谷五三九其社
「飯」　文藝誌名古屋より
「淚壺」　女子國文科出身にて市外田端三三一其社

〔九　月〕

「三年の友」「四年の友」　以上家庭教育輔導會編輯下澁谷宏文社
「經濟界」　小石川區大塚坂下町其社
「教材講座」　京橋帝國地方行政學會
「財界ポケット」　芝愛宕町實業之世界社
「ベリケード」　プロ詩人の發表誌として麹町元園町社會評論社
「文藝交錯」　東京帝大文學部有志により神田地平社書房
「ゆく春」　室積徂春編輯俳句誌麹町區下二番町三六其發行所

〔十　月〕

「童話資料」　西巢鴨宮仲二〇〇二日本童話協會
「探偵映畫」　京都市室町共同出版社
「文藝評論」　中澁谷凡潮社
「世紀文學」　早大文學部より其社
「農民」　府下砧村農村文藝會
「日蓮主義」小石川表町日本教育學會
「英學生新聞」　麹町富士見町其社
「文藝、思想」　反資本主義を旗印として淺草材木町四伴天連書房
「プロレタリア科學」　小野龍居、花房、石川、河野、大月氏等によつて
「Roumaji Bungei」　中井繁一編輯青山さめらら書房
「經濟」　日本橋南茅場町其社

〔十一月〕

「進む劇場」　神原泰氏中心にて進む劇場機關誌
「ソシウス」　淺野研眞主幹、文化批判誌として赤阪青山アパート七五ソシウス書房
「詩集」　井上康子編輯四谷區三光町
「哲學青年」小石川表町日本教育學會
「原書研究」　麹町飯田町光學堂
「撞球界」　神田錦町、二松堂
「教材研究遊戲と音樂」　府下高田町學校遊戲研究會
「塵塚」　神戸其社
「ヴエンデーゴ」市外池袋四〇八其社
「文藝精進」　東大、京大出身、在學有志によつて
「劇作家」麻布本村町一三二其編輯所
「帆船」　映畫、演劇、文藝雜誌として代々木西原九六七其社

〔十二月〕

「境地」　俳句雜誌松原地藏尊、川島つゆ氏により下谷谷中坂七九其社
「勞農」　無產政黨全國的戰線統一を目的として神田松住町勞農社
「行動者」　アナキズム文藝運動誌市外高圓寺一六八その編輯所
「思想と生活」　江原万里氏により市外練馬村三六二八
「問題」　府下吉祥寺其社
「教員受驗生」　初等教育者養成機關誌として神田錦町二松堂
「シネマ王國」　牛込區柳町其社
「雄邦日本」　牛込區赤城元町其社

○每號總督府々報、臺北州報臺北市報を附錄として添ふ
○無休刊新式輪轉機三臺使用每號十頁乃至十二頁二版刷朝刊、夕刊、發行

臺灣日日新報

○南支及南洋に通信機關を有し報道迅速
○新聞發行の外圖書の出版販賣各種の印刷、寫眞及印刷機械材料運動用品、理化科學機械の販賣並に代辯業を兼營す

臺北市榮町四丁目卅二番地
株式會社　臺灣日日新報社
電話　五三、五四、一二五、一二六、一四六、二一〇〇、二六七、五〇一、八三一、一二四八、一〇四四、二五〇三、二五四七、二八九三番
振替口座臺灣一〇番

臺中市寶町
同　臺中支局
電話一〇七番

臺南市錦町三丁目七十七番地
同　臺南支局
電話二一〇番
振替口座臺灣二〇番

東京市京橋區銀座二丁目九番地
同　東京支局
電話京橋一四九番
振替口座二六〇二番

大阪市西區靱南通二丁目
同　大阪支局
電話(長)土佐堀七四三番
振替口座大阪四三五番

◈新生堂發兌宗教書類◈

東京市神田區北神保町一番地
振替口座（東京六六二七三番 長野三四四六番

著譯者	書名	定價
白石喜之助著	基督教讀本	一、二〇、一〇
白石喜之助著	印度ヨギ哲學	二、五〇、一三
山本秀煌著	日本基督教史	上三、五〇 下四、五〇 二一
帆足理一郎著	宗教と人生	一、四〇、一〇
帆足理一郎著	死生と宗教	一、四〇、一〇
高柳伊三郎著	新約聖書概論	一、五〇、一〇
今井三郎著	人・自然・宗教	二、〇〇、一三
金子白夢著	體驗の宗教	二、四〇、一三
金子白夢著	行の宗教	二、〇〇、一三
由木康著	聖歌 新讃美歌集	一、二〇、一〇
高瀨無絃著	少年基督傳	一、八〇、一三
中山昌樹譯	ダンテ 神曲（地獄篇）	三、〇〇、一四
中山昌樹譯	同（煉獄篇）	三、〇〇、一四
中山昌樹譯	同（天國篇）	三、〇〇、一四
帆足理一郎譯	ミルトン 失樂園	上三、〇〇 下三、五〇 一四
帆足理一郎編	ドレエ 失樂園畫集	三、五〇、一三
中山昌樹編	ドレエ 神曲畫集	六、〇〇、一三
高柳伊三郎著	ダンテ 神曲序說	二、〇〇、一三
竹中勝男譯	ステッド著 無產者への福音	一、二〇、一〇
木下乙市譯	プラタブ著 愛の宗教	、七〇、一四
帆足理一郎著	哲學概論	三、〇〇、一四
今井三郎著	社會哲學概論	三、五〇、一四

大村書店

東京市牛込區白銀町二九
電話牛込五一四九番
振替東京四六九七五番

著譯者	書名	頁型	定價	送料
ヴキンデルバント 出隆	哲學とは何ぞや	四六 八八	一・九〇	〇・四
出隆	哲學以前	四六 五〇四	二・八〇	一・二
勝部謙造	ディルタイ 哲學の本質	四六 二三七	一・七〇	〇・八
佐野勝也	宗教哲學概論	四六 三九四	二・五〇	一・二
出隆	神の思ひ	四六 二六〇	一・六〇	〇・八
金子大榮	親鸞教の研究	菊 二三〇	二・〇〇	一・二
戸坂潤	ヴキンデルバント 意志の自由	菊 二五〇	二・〇〇	一・二
西晉一郎	教育と道德	四六 二六〇	一・八〇	一・〇
勝部謙造	新カント學派の教育說	菊 二八〇	二・八〇	一・八
出田中美知太郎	ヴキンデルバント プラトン	菊 二六六	二・八〇	一・六
フォルケルト	悲劇美の美學	菊 八〇四	五・五〇	一・八
金田廉	ゲエテとクライスト	四六 六三〇	三・二〇	一・二
青木昌吉	現代の獨逸戲曲	四六 七一〇	三・八〇	一・六
山岸光宣	バルナスの巡禮	四六 三六〇	二・五〇	一・二
團伊能	ミュンスタベルヒ 映畫劇その心理學と美學	四六 二四二	一・七〇	〇・八
久世昂太郎	西洋音樂概論	四六 四〇〇	二・五〇	一・二
辻莊一	ジンメル 社會學の根本問題	四六 二二六	一・五〇	一・二
小田秀人	西洋美學史	菊 五六〇	三・八〇	一・八
波常良	トレルチ 宗教哲學及宗教學の本質	四六 二九〇	一・八〇	一・二
菅圓吉	テエヌ 藝術哲學	四六 七四四	三・八〇	一・八
廣瀨哲士				

株式會社 **明治書院**

東京市神田區錦町一丁目
振替東京四九九一番
電話神田(25)一四一四番 二六九五番 二六九六番

書名	著者	頁數	送料定價
日本紋章學	沼田頼輔	菊一六〇〇	一五〇〇 四五
綱要日本紋章學	沼田頼輔	菊四五〇	三五〇 一六
枕草子評釋	金子元臣	菊二三〇〇	七五〇 二四
古今和歌集評釋	金子元臣	菊一一〇〇	六八〇 二四
定本源氏物語新解	金子元臣	四六（全三卷）各	上中各三八〇 一六
古事記新講	次田潤	菊八〇〇	五〇〇 一八
祝詞新講	次田潤	菊五八〇	四五〇 一八
大鏡詳解	佐藤球	菊七〇〇	四八〇 一八
重修増鏡詳解	和田英松 佐藤球	菊九〇〇	五五〇 二四
十訓抄詳解	石橋尚寶	菊六五〇	四五〇 一八
平家物語評釋	丙海弘藏	菊七八〇	四五〇 一八
徒然草詳解	丙海弘藏	四六五〇〇	二二〇 一二
新古今集詳解	鹽井正男	菊一四〇〇	八五〇 二四
増訂萬葉集選釋	佐々木信綱	四六五六〇	三二〇 一六
新古今集選釋	佐々木信綱	四六四〇〇	二五〇 一二
増補鎌倉時代文學新論	野村八良	菊四〇〇	三八〇 一六
國文學の本質	齋藤清衛	四六三三〇	二二〇 一二
論語解義	簡野道明	四六七六〇	三八〇 一八
孟子通解	簡野道明	四六一三〇〇	五〇〇 二四
老子解義	簡野道明	菊五〇〇	四二〇 一八

書名	著者	頁數	送料定價
和漢名詩類選評釋	簡野道明	三六一二〇〇	三五〇 一六
增修故事成語大辭典	簡野道明	四六二〇〇〇	六五〇 二四
字源（縮刷本）	簡野道明	四六二六〇〇	特五八〇 並三八〇 各三六
修訂官職要解	和田英松	菊四六〇	三五〇 一六
日本史講話	萩野由之	菊一一〇〇	特價七〇〇 二四
長慶天皇御即位の研究	八代國治	菊三〇〇	二八〇 一六
神祇史綱要	宮地直一	菊二五〇	二〇〇 一二
松菊木戸公傳	木戸公傳記編纂所編纂	菊二三〇〇	特價一六〇〇 一七二
天台宗聖典	硲慈弘纂	四六八〇〇	四〇〇 一八
漢和對照妙法蓮華經	島地大等修	三六八六〇	並三六〇 特四五〇 各一六
高等日本文法	三矢重松	菊八八〇	五八〇 二四
落合直文集	落合直文	四六六六〇	二八〇 一八

校註國文學叢書

▲既刊書目　四六判型總布裝　又八背布裝美本

書名	著者	定價
校註古事記	次田潤	一五〇
校註落窪物語	吉川秀雄	一五〇
校註枕草子	金子元臣	一五〇
校註大鏡	佐藤球	一五〇
校註増鏡	和田英松	一一〇
校註十訓抄	石橋尚寶	一五〇
校註保元平治物語	鳥野幸次	一五〇
校註古今和歌集	金子元臣	一三〇
校註新古今和歌集	尾上八郎	一八〇
校註金槐和歌集	佐々木信綱	一一〇
校註徒然草	丙海弘藏	一〇〇
校註土佐日記	鳥野幸次	七五
校註更級日記	關根正直	六五
校註關東紀行	鳥野幸次	六五
校註奥の細道	鳥野幸次	六五
校註雨月物語	佐藤仁之助	一〇〇
校註堤中納言物語	久松潛一	

同人社

東京神田・駿河臺西紅梅町一二
電話神田三四四〇番
振替東京二七〇六五番

書名	著譯者	型	賣價	定價	送料
社會問題叢書 資本蓄積再論	ルクセンブルグ・宗道太	四六	二四〇	一・六〇	一・二
同右 ドイツ農民戰爭	エンゲルス 松岡二十世	四六	三〇〇	一・五〇	一・二
同右 住宅問題	エンゲルス 小宮義孝	四六	二〇〇	〇・八〇	〇・八
資本蓄積論	ルクセンブルグ・益田・高山	菊	三〇〇	三・〇〇	二・〇
史的唯物論略解	ボルハルト 水谷長三郎	四六	一三〇	一・〇〇	一・〇八
フオイエルバッハ論	エンゲルス 佐野文夫	四六	一八〇	一・三〇	一・二
我等叢書 獨佛年誌鈔	マルクス 嘉治隆一	四六	一九〇	一・四〇	一・〇八
同右 マルクス評傳	カウツキー 櫛田・大内	四六	一七〇	一・二〇	一・二
同右 勞働辯護論	エンゲルス ホヂスキン 細川嘉六	四六	一七〇	一・二〇	一・二
同右 マルクス化とカント化	ブルム 波多野鼎	四六	一〇〇	〇・八〇	〇・六
同右 金と物價	ヴアルグ其他 笠信太郎	四六	一九〇	一・二〇	一・〇四
猶太人問題を論ず	マルク 久留間・畑川	四六	一二〇	一・〇〇	一・〇八
社會思想叢書 史的唯物論	ブハリン 檜崎輝	四六	五一〇	三・五〇	三・八
同右 近代唯物論史	プレハノフ 榎本謙輔	四六	三〇〇	一・四〇	一・二
同右 帝國主義と資本蓄積	ブハリン 友岡久雄	四六	二七〇	一・五〇	一・二

書名	著譯者	型	賣價	定價	送料
同右 現代支那社會研究	伊藤武雄	四六	三五〇	一・八〇	一・二
同右 各國無產政黨發達史	社會思想同人	四六	四六〇	二・〇〇	一・二
マルクスの民族社會國家觀	クノ 森谷克己	菊	八〇	〇・六〇	〇・四
マルクスの階級鬪爭理論	クノ 鳥海篤助	菊	八〇	〇・六〇	〇・四
婚姻及家族の發展過程	クノ 島海篤助	菊	一六〇	〇・九〇	〇・八
マルクスの經濟概念	クノ 濱島正金	菊	八〇	〇・六〇	〇・四
マルクス主義と倫理	クノ 東利久	菊	八〇	〇・六〇	〇・四
マルクスの唯物的歷史理論	クノ 濱島正金	菊	一八〇	一・〇〇	〇・八
マルクスの唯物的辯證法	クノ 森谷克己	菊	八〇	〇・六〇	〇・四
マルクス資本論	ボルハルト 水谷長三郎	四六	二〇〇	一・〇〇	一・〇八
科學的社會主義序論	ボルハルト 水谷長三郎	四六	二〇〇	一・〇〇	一・〇八
社會主義及社會運動	ゾムバルト 林要	菊	五〇〇	三・五〇	三・八
英國勞働階級狀態	エンゲルス 竹内謙二	菊	五〇〇	三・五〇	三・八
大英社會主義國の構成	ウエッブ 丸岡重堯	菊	五〇〇	三・五〇	三・八
消費組合運動	ウエッブ 山村喬	菊	六〇〇	四・〇〇	四・二
消費組合發達史論	ポッター 久留間鮫造	四六	三五〇	二・三〇	二・〇〇
マルサス人口論	高野・大内	四六	三六〇	二・三〇	二・〇〇
本邦人口の現在將來	高野岩三郎	四六	一五〇	一・〇〇	一・〇八
社會統計學史研究	高野岩三郎	四六	二〇〇	一・三〇	一・二
最近ドイツ社會黨史	森戸辰男	四六	二〇〇	一・三〇	一・二
現代イギリスの政治過程	大内兵衛	四六	二二〇	一・五〇	一・二
近代ロシア社會史研究	嘉治隆一	四六	五〇〇	二・八〇	二・五
勞働組合運動の理論と歷史	ゾムバルト 森戸・細野	四六	三〇〇	一・六〇	一・二
產業別勞働組合主義	サベーヂ 松澤兼人	四六	五〇〇	二・五〇	二・〇
鬪爭の跡を訪ねて	ローザ・ルクセンブルグの手紙と生涯 石濱知行	四六	三〇〇	一・八〇	一・二
新社會の建設	井口孝親	四六	三三〇	二・〇八	一・五
法廷に於ける小作爭議	北澤新次郎	四六	三〇〇	二・〇〇	一・二
醫療の社會化	水谷長三郎	四六	一八〇	一・〇〇	〇・八
產業能率の研究	社會醫學研究會	四六	一一〇	〇・六〇	〇・六
社會心理學	暉峻義等	四六	二七〇	一・八〇	一・二
無產者心理學	ヂンスバーク 下村利一郎	四六	三三〇	一・〇〇	一・〇八
無產者政治必携	プレブス叢書 片上淳	四六	三〇	一・〇〇	一・〇八
無產者經濟學	プレブス書叢 田所輝明	四六	二〇〇	一・〇六	一・〇八
農業の社會化	カウツキー 河西太一郎	四六	二〇〇	一・三〇	一・二
社會主義と農業問題	ミルウテイン 河西太一郎	四六	二三〇	一・五〇	一・二
英國は何處へ往く？	トロツキー 荻原・越智	四六	一五〇	一・八〇	一・二
ロシアは何處へ往く？	トロツキー 田中九一	四六	二四〇	一・五〇	一・二
階級意識とは何ぞや	ルカツチ 水谷長三郎	四六	二〇〇	一・四〇	一・二
史的理想主義か史的唯物論か	淡德三郎	四六	八〇	〇・四〇	〇・二
永遠の眞理平等自由の批判	エンゲルス 平野義太郎譯	四六	一七〇	一・〇〇	一・二
セツツルメントの研究	大林宗嗣	菊	三〇〇	一・八〇	一・二
政治の社會的基礎	大山郁夫	四六	二三〇	一・五〇	一・二
日本勞働年鑑(2)	大原研究所	菊	六三〇	三・〇〇	二・二
日本農民の生活(上下)	瀧川政治郎	菊	七八〇	六・七〇	一・二
剩餘價値學說史	マルクス 大原研究所	菊分冊各約五〇〇	各三〇	各二・〇〇	各〇・七
產業民主制論	ウエッブ 菊			八・〇〇	二・二
ヘーゲル論	プレハノフ 高野岩三郎	四六	一二〇〇	一・〇〇	一・二
ロシア農村共產体研究	笠信太郎	四六	七五	〇・五〇	〇・二
普選法罰則研究	マルクス 喬	四六	六〇	〇・四〇	〇・二
普選法詳解	勞農黨	四六	一三六〇	一・〇〇	一・二〇
無產者政治必携	產業調査勞働所	四六	一三〇	一・〇〇	一・〇八
無產者法律必携	產業調査勞働所	四六	五〇〇	三・八〇	三・二

京都帝國大學教授 醫學博士 清野謙次著 （最新刊）

日本石器時代人研究

京大清野教室の活潑なる研究と偉大なる業蹟とは正に現代人類學界の一大驚異である。その勞作の發表は常に、學界の耳目を聳動しそれは又直ちに從來の日本人類學々說崩壞の宣言であつた。かくして石器時代人民アイヌ說は根抵的に覆へされた。彌生式土器使用人民固有日本人說及び繩紋式土器使用人民アイヌ說も亦その支持は已に困難である。かくて濱田博士の述べられし如く、本學說は吾が人類學界の一大革命である。本書は日本人類學史上最も意義深き革命紀念碑となるであらう。

菊判バツクラム面取裝總紙枚四四四頁、コロタイプ十八、挿、詳表九

定價四圓六十錢 送料 向拂二十七錢 其他五十五錢

清野謙次著 日本原人の研究 價三、〇〇 送三七
長谷部言人著 自然人類學概論 價三、〇〇 送三七
清野謙次 金關丈夫著 人類起源論 價五、〇〇 送三七
八木奘三郎著 滿洲考古學 價八、三〇 送三六
清野謙次著 人類學論文拔刷集 限定四十部 價五、〇〇 送三六
足立文太郎著 日本人體質之研究 六月下旬刊

東京神田駿河臺 北京甲賀町四番地 岡書院 振替東京六六七一九番 電話神田二七七五番

好もんじやく論

小泉洽

ふみ、本、草子

ひまあるにまかせて、書籍の名稱を尋ねるもなか〳〵に興深きことゞもではある。

書籍と云つても、これを「冊子」と云ひ、或は「竹帛」となし、或は「典墳」、「圖書」「文籍（もんじやく）」、「翠軸」等の呼び聲をせん鑿するは、之辭書編纂家の仕事であつて我々の關せざるところである。それよりも私はさきに引用し、而して又ダヴェンポートが問題としたる「ふみ」とか「本（ほん）」、「草子」などゝ稱する名稱に就て古い文書に眼をさらして見ることを欲するのである。

先づ「ふみ」である。

今試みに谷川士清の書いた「和訓栞」を開いてみるに「ふみ、文書をいふ、日本紀に經典をもよめり、經見の義なるべし、通茂公「うつしおく筆になにかはますかがみ手にとりて見ぬいにしへもなし」、一說に文の音轉なりと云へり」云々とこの人一流の說明をしてゐる。

「和訓栞」の說を奉ずる輩でもあらうか、更にこれを布衍していふ、蓋し「文」の音は「ブン」であるからこれを「フミ」に轉化させたのである。宛然「公」の音は「キン」であるから「キミ」に轉化したが如く或は「蟬」は「セン」なれば「セミ」に轉化したが如くにと主張してゐるのである。して見ると、「和訓栞」

一派の論者の說をとるならば、「ふみ」といふ名稱は漢語が我邦に渡來する以前にあつては無かつたものと前提してゐるかのやうに思はれる。けれども、それは我邦中世並びに近世に於ける漢學偏重論者の見方であるのである。なぜなら「せみ」は、蟬の鳴聲から來た名稱だから「蟬」の語渡來の以前から既に我邦にあつたものである。況や「きみ」に於てをや。音の「ン」を「ニ」と讀むは「ブン」を「ふみ」とせるとは同列のものではない。

「錢」センを「ゼニ」、「蘭」ランを「ラニ」と讀むは本來の音にして、その轉化ではない。而も「ン」を「ミ」になす轉化なるものを、不省淺學にしてこれを詳かにしないのである。

故に、私は、ダヴェンポートが「ふみ」は「ふだ」の轉化と做したと同樣に、さきの說を信ずるを得ないのである。

又「ふみ」を「經見」と見たるも同うじ難い。なる程、「古語拾遺」の序にもある如く、我邦の上古には今日我々が使用してゐるやうな文字は存在しなかつたかも知れない。が、一種の文字――恰度、今日南アメリカの土人間に使用せられてゐるといふ草蔓を結び合せて、その結び方に依つて或意味を表すやうなものがあつたらしいのである。それを「みづくき」と稱したらしい。

出雲の大社で年に一度づゝ行はれるとかいふ「みづくき」の神事と名附くる祭りがあるが、私はその神事の內容に就ては全く知らないのである。が、何等かの關係があるのであらう。

いづれにしても、この「みづくき」「とふみ」との間には一脈の關係がなけらねばならない。それかあらぬか、五十嵐篤好は「天朝墨談」の卷三に於て、「ふみ」の「ふ」は「經」であるが、「み」は「草木の實」であるとも斷言してゐる。換言すれば、文字てうものは經（たて）にも、卽千年万年の末までも、緯（よこ）にも、卽千里万里の外までも行き得ればかく云へるなりと稱してゐる。

然し、それでも自分は未だ不滿足だ。

上古にあつては、動物の名稱は皆その鳴聲からとつたものであつた。恰度上述の蟬のやうに、又小兒が猫を「にあ〳〵」と稱び、犬を「わん〳〵」と呼ぶやうに。――これは獨り日本のみのことでなかつた。

古代ギリシア人も同じ手法を自然にとり、「馬」をヒッポース Hippos と云ひ、羊のことをホイース Ois といつたのも皆その鳴聲から來た名稱であつたのである。であるから恁ういふ方法から或言葉が作られたといふは、獨り我邦のみの事柄ではないのである。

かゝる幼稚なる言葉を、字音のまゝに書現すことが出來るやうになるまでには、可成りな時代を經ねばならなかつたに相違ないのである。

故に、極く上古にあつては、この種の言葉を記憶の便宜として蹟にとゞめて置く爲めに、彼等はある水草卽「水莖」を結んで置いて、その目じるしとなしたと看做した方が事實らしい。で、万葉集の中にも中皇女命の歌に、

きみがよもわがよもしれやいはしろの岡の草根をいざ結びてな

といふ歌のあるに見るも、その邊の消息を想像出來やうかと思ふ。

言葉の音を漢字で書現すやうになつたのは、「日本紀」の跋に「聖德太子始以漢字附神代之文字傍」とある時からであつたかどうかは判らないけれども、兎に角便利な字音を書現す法を知るに至つた古代日本人は、やがて「ふみ」の新らしい創作者になつたことは事實であらう。

又「ふみ」を書現す道具たる筆も、いつか「みづくき」の名で呼ばれるに至つた事は、源氏物語、梅が枝卷をあげずとも皆大方の知るところであつた。又「みづくきの跡」と云へば文字の意だ。

文字の意は手紙を指す言葉にもなつた。「ふみをこす」とか「ふみ待つ」とかいふ成語はざらに見るところ。

手紙をば又「玉梓」とも稱した。再び「和訓栞」を開けば、「たまづさ、書簡をいふ、玉梓の義萬葉集に見えたり、又玉梓の使とも見ゆ、弓をあづさとのみ讀み、矢は、やるの訓なれば思ふ心を文していひやるをたとへてほむる詞を加へて玉梓といふなるべし」とある。

「圓珠庵雜記」には、玉梓の頭書に宣長いふ、「上古には人のもとへ使をやるには、梓の木に玉をつけたるをもたせて使のしるしとせし也。玉梓の使と常にいふは、この事なり」いづれも無理な説明のやうに思はれる。特に圓珠庵の好古的詩人の言には、たゞ古代こそ玉の生ふる黄金時代なる由を主張してゐる許りのやうに思はれる。

が然し幾分の眞理が、後者の裡に含まれてゐないでもないのである。なぜならば、我邦古代にあつては文を送るに後代の風習の如く文箱に入れてする代りに、木の枝に文をくゝし附けてもたらしたものであるからだ。されば、契沖の「梓を使にもたせ」たといふ點はまんざら當つて居らないことはないといふのだ。けれども梓の木に玉を附して、使者の記しにしたといふは説明に過ぎないであらう。

又、木の枝に文をくくし附けて人の許に送るのに、わざ〳〵梓の木を選んだといふのは「天朝墨談」の記者の言に從へば恁うである。即、梓の木は弓につくる木であるから、此方のものを彼方へやる功ある樹木である。故に文をして此方より彼方へと滯りなく、思ふかたへと行きとゞかむ心から、必ず梓の木を選んで、文をくくすのに使用したのであらう云々と述べてゐる。あるひはさうかも知れない。

で、「玉梓」などといふ言葉のごときも、文をくくし附ける梓の枝を美稱して、かくは云へるにやあらんである。決して契沖圓珠庵の云ふやうに、別に玉を附けたものではあるまい。

けれども、總て文をくくし附くべき木は、必ず梓の木に限られてゐた譯でもないらしい。蓋し萬葉集にも、

みよし野の玉松が枝ははしきかも君が御ことを持ちてかよはく

とある位だ。これは獨り萬葉集のみに見られたことではない。「かげらう日記」にも、苔生ひたる松の枝に文を附けたる事實をかゝげてゐる。

更に後世に至つては、源氏夕顔卷に、光の君より軒端荻の君へ遣はせる文の中に「ほのかにも軒端の荻を結ばすは露のかごとを何にかけまし、高やかなる荻につけて」といふところから察すると、木でなくて荻にも文をくくし附けたらしい。

野分卷には、野分の吹きしあした夕霧の中將より明石の姫君へ文を書かんとて「こと〳〵しからぬ紙や侍る御局の硯とこひ給へば、みづしによりて紙ひとまき御硯のふたにとりおろして奉れば……(中略)紫の薄やうなりけり墨心とどめておしすり筆のさき、うち見つゝこまやかにかきやすらひ給へるさまいとよし、されどあやしくさだまりてにくき御日つきこそものし給へ

風さわぎ村雲まよう夕べにもわするゝまなくわすられぬ君

吹きみだりたるかるかやにつけ給へれば、人々かたのゝ少將は紙のいろにこそととのへ侍りけれと聞ゆ、さばかりの色もおもひわかざりけりや」云々

これに據つて之れを見れば、紙の色と全く同じ色の「かるかや」に文をつけて送つたやうである。紙の色と文をくくし附ける植物の色と同じものを求めた許りではない。又、文と俱に書送れる和歌の內容とも相呼應するものをば選んでゐる事である。

例へば同じ源氏の藤袴卷に螢兵部卿より文やるところに「云ふかひなき世は聞えむかたなきを

朝日さす光りを見ても玉笹の葉分の霜をけたずもあらむ

おぼしだに知らば慰む方もありぬべくなむとて、いとかじけたる下をれの霜も落さずもて參る御使さへぞうちあひたるや」と。

即、いとかじけたる下をれの笹に、うちあひて換言すればよく調和したる使者は、よく肥えて元氣良く始終にこ〳〵顏の者ではない。よろしくそれは、痩せて泣顏のものをもたせよとて、その使者までも、文くくし附ける枝ばかりでなく、うちあはせる事を考へてゐるではないか。

斯く「ふみ」に就て次から次へと古き「もんじやく」を搔きひろげて見ゆけば未だふみも見ねど果てなきことゝ思ふから、先づこの邊にて打切りにして、書籍の事を「本」といふその由來に就て暫時考へて見度い。

◇　◇

「ふみ」に關して結局その由來を摑み得なかつた私は、又「本」の典據も判らない。

只私の云ひ得ることは、「本」といふ名稱はよほど昔から云はれて來たものだといふ丈である。そんな事ならば、誰でも判つてゐるであらうから今更事々しく、云ひ立てる程もないに相違ない。これも全く、小人閑居すれば云々の結果、恁うした余けいな、せずとも良い詮索をする譯である。

世間を騷がしてゐる圓本の跳梁が、あの猛威をしづめたらば、我々マイナー著作家連も、金ペンから火を發する程書きまくらねばなるまいが、今のところは、せずとも良き惡事のみで胸なで下して觀望のみしてゐる次第である。

扨、「本」の文字の最も早く出てゐる文獻として、私は「皇朝類苑」を擧げる者である。この本の「日本」の條にいふ、

安南郡督吳越錢氏、多因二海船一通レ信、天台智者敎五百余卷、有レ錄而多闕、賈人言、日本有レ之、錢俶置(イタシ)二書其國主一奉二黃金五百兩一、求レ寫二其本一、盡得レ之訖、

云々と「白河燕談」に載せてある。

又「佛國記」には、北天竺諸國、皆師々口傳、無二本可一レ寫、云々とあるのを見る。

恐らく晉時代頃より既に、書物を「本」と號してゐたといふは否むことが出來ないであらう。

「昆陽漫錄」も、孔子家語後序の一節、天漢後、魯恭王壞二夫子故宅一、得二壁中詩書一、悉以歸二于國一、皆所レ得二壁中一科斗本也の句を引用して云ふ「本と云ふこと久しけれども本義明かならず」と告白してゐるのである。

後漢書には「草本」とあり、又北史には、「正本」の言葉がある。

思ふに、文選魏都賦の注に、李善曰、風俗通曰、案二劉向別錄一、讎校、一人讀レ書、校二其上下一、得二誤謬一爲レ校、一人持レ本、一人讀レ書、若二怨家相對一爲レ讎、とあるところより察すれば、「本」とは「正本」の義で、すべての「もとひ」を書附けるものといふ意から出でたのではないだらうか。

「草子」は「草紙」、「雙紙」、「葉子」、「造紙」等の文字を當てられてゐる。これは幾枚かの紙を冊子にしたるもの詮り「冊子」の假名あて字であらう。

程大昌演繁露の十に、

古書皆卷、至レ唐始爲二葉子一、今書冊也、とあるに見るも單なる憶說ではないやうである。

更に同書十五に、

古書不二以簡策一、縑帛皆爲二卷軸一、至レ唐始二レ爲葉子一今書冊也、然古竹牒已用二疊レ簡爲レ名、顧レ唐始二以縑紙卷一軸、改爲二冊葉耳一と、くどいやうに說明をなしてゐる。

後代に及び葉子乃至草紙と云へば、手習雙紙か乃至稗史小說、又は女人の書きしるしたるなぐさめの文書を意味するやうになつたことは讀者の已に知る通りである。

が、素はさしたることは全然なかつたものだ。

＊　＊　＊　＊　＊

賣書考

——(1)——

「世界の古書」と名附け得るものを求めるならば何程でもあるであらう。遠くは紀元前四〇〇〇年頃に書かれたといふカルデアの水害記錄（之は Sir Henry Layard といふ考古學者の發見せのるものにして現在は英國博物館に在り）を始めとして、エジプトのピラミッド內に見出される諸文字、或は紀元前六百八十一年に世を去つたと傳へられるアッシリアの王センナケリブ(Sennacherib)がニネベの文庫より發掘される古文書等書き擧げる丈でも大變である。

だが、私の玆にお話しやうといふのは、さうした單なる古文書に關係してゐないのである。それよりも寧ろそれが記錄されて一般に賣られるやうに仕組まれた書物でなければならない。

それから第二は世界的に知られてゐる有名な古書のみを取つて紹介するのである。決して無暗やたらに大風呂敷を擴げるものと誤解されては、ちと迷惑する次第である。

さうした種類の本は、先づエジプトに於て發見せられる。エジプトの本は旣述のカルデアの古記錄のやうに素燒の土器に認められたものではない。又アッシリアの古文書のやうに石の小牌に書かれたのでもない。それはパピラス(Papyrus)と名附くるナイルの峽谷に生ずる一種の蘆の髓で作られた紙に書かれたものである。パピラスの髓を縱橫十文字に累ねて重い石かなんぞで、それを壓搾して作つたと云はれてゐる。

筆は草の莖か籐乃至竹を削つて用ひてゐた。

扨、かゝる筆紙に據つて記錄されてゐた古書で第一に擧ぐべきは、所謂「死人の書」(The Book of The Dead) として知られたものである。

その內容は一體怎麼事が書かれて居たかと云へば、卽、神々に對する祈禱文とか聖歌乃至死人の靈が來世に行つてから出會ふであらう所の樣々なる經驗からして、その死人の靈等が受ける最後の審判の事柄がその內容であつたのである。

當時のエジプト人等は、死人が來世に旅立つ爲めには、怎うしても「死人の書」が必要であるやうに

信ぜられてゐた。で今日發掘せられる古い墓からは、必ずこの書が一冊づゝ現れないと云ふことがないのである。そこで、恁うした必要からエジプト人は皆爭つて「死人の書」を購つた譯である。かゝる點から見て、此書は賣書史の起原を做すものとして忘れてはならないであらう。

エジプトに於ては斯くの如き書物を始めとして、多くの文學は總て寺院内に源を發してゐた。エジプトの諸神中、トート＝ヘルメス(Thoth-Hermes)の神は「書物の家の王」として僧侶等にあがめられてゐた。

さうした譯でエジプトの文學は皆宗教的色彩の濃厚なもの許りであるといふも、又當然な事柄に屬するのである。

又宗教的の文書でないものには、宮廷に關する記錄を始め、一般民衆の間には昔から彼等の間に語り傳へられて來た傳説を書いた文書などもあつた。其他道德に關する書物、律法書、數學書、修辭學書、醫書、測量學書、地理書、旅行記などもあつたらしいが、今日殘存してゐるのは、極く僅少のみであつた。それに此等は、今日の我々から考へて非常に珍らしいものには相違ないけれども、未だ世界的に知られた古文書ではないので我々はこれに就て語ることを避ける。

それよりも「死人の書」に次ぐ有名なる書物「プターリホテップの教訓」(The Precepts of Ptah-Hotep)に就て見やう。

プターリホテップといふ人は、メムフィスで生れ、詳細な事は勿論判らないのであるが、紀元前三五五〇年頃に生きてゐた者だと考へられてゐる。古書中の古書として珍重されてゐるもの〻著者であつた。

その年代は、モーセの出現以前二千年、インドのヴェダが編纂される以前之も二千年、ホーマー及びソロモンの箴言が世に出る前約二千五百年の大昔に書かれた本だといふから更に驚かざるを得ないではないか。それはソロモンと現代に至る年數とプターリホテップとソロモン時代と比較して、後者の方がずつと年數がかさむでゐるといふに至つては尙以て思ひ半ばに過ぎないであらう。

之もパピラス紙を用ひて書かれたのであるが之は長さ二十三フィート七吋と縱五フィート 0.87 吋のものを用ひてゐる。今日では之は巴里の "Bibliothoque Nationale" に特別に所藏されてゐるのである。今左にその一部をば Gunn といふ人の飜譯から更に重譯して見る。

人々の裡に怖れを招かざれ、
若しそれを犯すあらば神之を罰せん。
この裡に生命ありと云ふ人あらばかゝる者はその口よりパンを奪はれるであらう。
又我が思ふものを已れ勝手にて捕へ得るなりと云ふあらば、かゝる者は打ち倒されるであらう。
持たぬ人に我が持てるを與へなば彼はその他の者を得るに至らん。
審判に對して用意する人は罰せらることなし。神は何者でも命じ得る者である。審判に列すべきことさへ命じ得るであらう。故に親切の家に住め、かゝる人は彼等自身惠みを受くるならん。
汝よりも置位高き所の人々の客たらんか、汝よりも置位高き人の汝に與ふるものは之を受け、唇に置け、又若しその家の主人の眼の前に座し彼を見得るとも、多くの管見を彼に向けざれよ。蓋し彼を凝視せばその人の心を嫌惡せしむるが故に。
彼が汝に話しかくる迄、話しなすな。何ぜなら人は皆彼の意見の裡に、惡魔が住せるか否かを知ら

ざれば。

又、彼が汝に質問を發する時に語れ。然る時は汝の言葉は彼の意見に於て、良きものとして受け容れられれん。

食物を前にして座せる貴人は、彼の心が彼に命ずるまゝに分割する。而して彼の好きな者にそれを與ふるに違いない。――これこそ晩餐の法式なり。

彼の手を導くものは彼の心である。

貴顯たるは稟與のものにして、到底達せんとしても得べきではない。斯くの如く又パンを食するも神の攝理の下にあるなり。さればパンのことを論ずるは總て痴人なるのみ」云々云々。

右の如き「プターリホテップの教訓」に比べると我が孔夫子の論語などの所論は、ずつと整つてゐる。だから孔子や老子に仍る文献も所謂私の「世界の古書」の範疇に入るし、又、所謂その思想上からいふも、今も話したやうに、ずつと整つた處世哲學として、玆に開陳すべきが、順序だけれども、近い所は別に「遠交近攻」の政略からでもないが、格別珍らしくもないだらうから割愛する。

―(2)―

支那を度外視して印度に來れば、有名な吠陀の書がある。これは皆人の知る如く、サンスクリット文字を使用する國民が有する、最古の聖典であるのである。基督以前約一千年に書かれた書物として認められる。

紀元前六世紀末に生きてゐた釋尊の說教集乃至教訓集は、勿論始めから書かれてあつたものではないが、假令文書として世に現れるに至つてからでも、別に錢金で人々の間に賣買される性質の書物ではなかつたに相違ない。けれども、世界的に有名な古書の一つに數へられる立派な資格を持つてゐる事は事實だ。

が、何と云つても賣書時代に於ける世界の古本を發見し得るのは、ギリシヤ時代に入つてからの後の事であると云はねばならないであらう。

抑々ギリシヤ人に文字を教へ、而してこれに書物の作り方を教へた者といふのは、北アフリカに住んでゐたフェニキア人の外になかつたのである。當時彼等はカルタゴに首都を營み、世界の商業權を一手に握つてゐたのであるが、その商業上の必要から早くも文字の運用法を知つてゐたのである。ジェボンの如き學者の說に從へば紀元前八世紀にして既に現在見るギリシア語アルファベットを考案してゐたものゝやうである。而して紀元前五百年頃にはキオス(Chios)嶋に男子のみを收容する學校を設立して、ギリシア人の青年等を盛んに教育したやうである。

當時の教育といつた所で、未だ〳〵幼稚きはまるものであつて簡單な計算とか、手紙を書けるやうになれば頂上の事であつたのである。だから此の時代に於けるギリシア人が、讀書の習慣を持つてゐなかつたといふも無理からぬ事どもであつた。

彼等は讀書をする代りに、一人の物知りがゐて、ホーマーの叙事詩だとか、その他の神々の傳說とかを語つて聞かせてもらつては金錢を支拂ふことをしてゐた。それをラプソドスと稱してゐた。

ラプソドスと萬葉集第三に出て來る志斐嫗(しひのおむな)と、まア殆んど同じことをする者であつたやうである。唯兩者の相違する點は、前者は一般民衆の爲めに色々なこととを暗誦して噪るならば、後者は宮中にあつて唯一人持統天皇に對し奉り「否といへど强ふるしひのが强ひたがり」をする丈の差であつたので

ある。

で、恁ういふラプソドス連中は皆町から町へ村から村へと旅をしては、彼等の記憶してゐる所を物語りつゝ生活してゐたのである。かゝる點から見ると、初代ギリシアの賣書史の起原はラプソデストにあつたものと見ても大した間違ひはないと思ふ。

ギリシア文化を代表するアテンをそのまゝナイル河口のデルターに移したものをアレキサンドリアの都とする。玆の圖書館は書籍に就て語る程の者が皆忘れ得ぬ過去の寶庫として記憶されるものである。又この都市に居た星學者にして且つ地理學者として知られるクラウデヰウス・プトレヤイウス(Claudius Ptolemæus)は、熱心なる文獻聚集家であつた。彼はギリシアに於ける有名なる文書は大旨集め得てゐたといふが、それでも同じ都の大圖書館には比較さるべくもなかつたやうである。

記錄に據れば、この圖書館の書棚に納められてゐた書籍數丈でも實に七〇〇、〇〇〇卷の多數に登つてゐた。勿論そこにはイリアッドやオデッシイーを始め、プラトンの諸書からピタゴラスの文獻、アリストテレス、クセノフォン、ヘロドタス、ユーリピデス、ソフォクレス、エシラス、アナクレオン等無數の書物が自由に發見し得たこゝと思ふ。けれども、夫のジュリアスシーザーの無謀は、かゝる得がたき天下の寶庫をば、紀元前四十八年といふにむざ〳〵戰亂の間に祝融氏の手に委せしめたことは、幾度び長嘆するも未だ盡くるを知らないのである。

戰亂に失ひたる尊き文獻は數多いであらうが、ローマ人の書いた土木工學に關する記錄などもその忘れられぬ一つであつたのである。由來、ローマ人といふは、非常に道路を作ることに就て長けてゐた。頗る科學的方法で而も秩序整然たる計畫の下に世界の縱横に向けて、今日の人も及ばないやうな名道路をつくつてゐたのであるが、さういふことに就て書かれたものも澤山あつたに異いないだらけれども、現在では何等その蹟も止めて居らないのである。

恁うしたアレキサンドリアや羅馬に於て書かれてゐた本も、曩に話したパピラス紙か乃至羊皮紙に據つてゐた。而してその本の形は皆卷物樣につくられてあつた。

勿論印刷術の發明される以前のことなので、それは筆で書かれたもの許りであつた。筆寫を專門にする書記といふ者が澤山ゐて、原本を一人が讀むと、一齊にそれをパピラス紙か羊皮紙上に書寫したのである。それのみでなくさうした書記生等は、その寫本を金泥や朱乃至紺、紫などの色を使つて裝飾することさへしたのである。

かゝる書寫用に使つたインクは怎麼ものであつたかと云へば油煤か又はゴムから製せられたものであつたと傳へられる。卷物の裏側は大抵サフラン色に塗られた。そして黃色か紫色の羊皮紙の帙に收められてゐたのである。

又、恁うした書記生は同時に本屋でもあつた。彼等は所々から原稿を借りて來たり、或は貸賃を支拂つて之を借りて來て書寫しては一般の人々に賣捌いたものである。恁した書記生兼本屋が、紀元前五十年頃にアテンには澤山ゐたのである。而して彼等は各々街の市場に店をしつらへてゐた。

アレキサンドリア時代になると、さうした組織が一段と進んで來て、書籍賣買の取引が非常な大懸りで以て行はれるやうになつていつた。而してキリスト出生前三世紀頃には、この都市はギリシア文學の中心地とまで謳はれるに至つたのである。

この頃から、段々羅馬人はアテン人やアレキサンドリア人の眞似をして著述をする事を始めたので

ある。

この如きアレキサンドリア時代に於ける有名な世界的の古本として擧げ得るのは七十人譯（セプターギント）と稱せられる舊約聖書のギリシア語譯が、七十人のユダヤ人の學者等の手に據つてなされたものゝそれである。

—（3）—

アレキサンドリアが、古代に於ける書物出版の中心地となつた主なる原因は、パピラス紙產出のそこが中心地であつたことに歸せられると云つてよかつた。而してその第二の原因として擧げ得るのはそこの地理的關係が當時他の歐洲諸國の戰亂の渦中に惱んでゐた時に際しても、殆んどそれ等にわずらはされずに濟すことを得せしめたが爲めであつた。それで、既述の圖書館內にあつて多くの書記生等が集まつて盛んに平和裡に書寫出版の業に從ふことが出來たのである。

恁うしたアレキサンドリアの文獻的の優越位置は、羅馬人がそこを占領してからも尙長い間續いてゐたのであるが、その後やうやくギリシア語の流行が廢り、拉典語の勢力が歐洲の天地を支配するに至つて、始めて他にそれは移されたのである。それまでは、アレキサンドリアと云へば文獻產出地としてのみでなく、文化と學術の淵叢地として全世界の人々の憧れの地であつたのである。それは紀元後五世紀に至つても、その絕大なる勢力は連綿として繼續してゐた。

が、何時しかその勢力は日に增し盛大に趨きつゝあつた羅馬に奪はれるやうになつていつた。けれども假令その勢力は羅馬に移つたと雖、未だ〳〵羅馬人等はギリシア語の書を讀んだり、ギリシア古典の文法に從つて文字を列ねることを以て名譽と心得へてゐたのであつた。そうした外國文學愛好の時代は其の後可成り續いた。

けれども遂にその時が來た。その第一聲とも云はれるものはギリシアに於ける劇文學が拉典語に飜譯され、或はホーマーが拉典譯されたことに始まつた。

次いで紀元前百年より基督降生までにシセロー（Cicero）、ルークレテウス（Lucretius）カイザー（Caesar）ホーレス（Horace）ヴォルギール（Virgil）、オーヴィッド（Ovid）、リーヴィ（Livy）などいふ騷人文士が、雲の如く出づるに至つたのである。

然し自分は玆で文學史の筆を執つてゐるのではないから、それ等に就いて詳しい事を詳べてゐる際はないのである。それよりも斯くの如き時代に於て書物が怎ういふやうに取扱はれてゐたか、といふことを諸君に語り度いのである。で、叙述の便利上、自分は左にジョセフ・シェイラー（Ioseph Shaylor）の書いた「書籍の魔力」（The Fascination of Books）といふ書物の中から當時のことを書いた一節を引用しやう。

「羅馬人の圖書館や本屋は當時の學者社會と同時に流行社會の人々の集合場所になつてゐた。文學者や批評家等は、此等の場合に集まつて來ては、書寫生によつて出版される新刊書が出る每に、それに就て論じ合つてゐた。それ等の店は孰れも人々が、始終往來する場所に設けられてあつた。新刊書だとか或は標準とせらるべき書物の題目は、此等の店の前に恰度今日の廣告のやうに張り出されてゐた。又、近刊準備中の書物も同じ方法でそこに列べられてあつた。

あまり世間に持映されなかつた詩人の書いた書物は、屢々魚やその他の品物を包む包紙に使用せられるやうになつた。又さうした賣れない澤山の在庫物（ストック）は、本屋の手から公立浴場の竈の中へと移される運命を持つものがあつた。かゝる廢物所致法をば近代の出版屋も時々試みることがあるのであ

る。（中略）

又、印税の方法もその時分から既に設けられて在つて著者はその勞力に對し、屢々支拂はれてゐたものであつた。然し大抵の者は、書物に對して金を要求することは一種の墮落であるかの如くに考へてゐた。然し當時にあつては版權といふ考へがなかつたので何人でも次から次へそれを書寫したり、再出版を試みさへした。」

印税に對して、この時代の著作家がさまで敏感でなかつたといふのも又他に理由があることであつた。何ぜなら古代羅馬に於ける著作家等は皆各々パトロンがあつて、いづれも生活を保證されてゐたからである。例へばホーレスとか又はヴヰルギールなどの詩人等は、マイケナス（Maecenas）といふ學問好きの百萬長者によつて生活の資料を支給されてゐた。で、彼等はマイケナスの最も有用なる家來の如くに取扱はれてゐた譯であるこのことは、獨り西洋に許りあつた事柄ではなくて我邦德川時代にあつても屢々見る所のものであつた。

爾來やうやく羅馬帝國の權威、地に落ちて、謂ふ所の暗黑時代に入るや、書物の世界は段々と狹められていつて、辛くも僧院の神秘の薄やみの裡にのみ限られることになつた。で、何處の僧院にも必ず"Scriptorium"と名附くる書寫室が設けられてあつて、僧侶等はそこで盛んに復寫や著述乃至書物の裝訂などの仕事に從事してゐたものである。（さうした僧院内の書物製作所の趣をばメレジコフスキーが彼の「先驅者」と名附くる小説の中に面白く描寫してゐる。）

そして遂には僧院の第一の仕事は、書籍製造販賣にあるもの〻如き觀を呈するに至つた。そこで奇妙な事には殺生禁斷の大元締である僧院の大所が、寄つてたかつて例のフランの大帝シャーレーマンに歎願して、書物の表紙に使ふ爲めの鹿の皮を得る目的を以て、狩獵權の許可を得たことさへあつた。

大體それ位まで製本業が盛んに行はれてゐたのであるから、當時出版されたもの〻裡に價値ある文獻があるだらうかと思つて探してみるけれども、これと云つて「世界的」の銘を打ち得る程の名作のないのは甚だ遺憾至極である。若し自分がこの時代の文獻に就て「世界的」の銘を與へ得るものがあつたとすれば、それは本の裝訂裝飾にあつたと云はなければならないのであらう。

裝訂と云つても今日の書籍のやうに唯その表紙丈を美しくするのではなくて、本文の書出しの頭文字を唐草模様で飾つたり、行間の所々に花や鳥や王冠のカット様のものを挿入したり、ページの周圍とか、天地に、細かい種々なる模様を色彩入で書入れたりする恐ろしい念入りのものだつた。

さうした裝飾入りのまづ一番古い書物ではヴヰルギールの詩集を擧げることが出來やう。それは今日ヴァチカンの法王宮に保存せられてゐるさうであるが、全ページ犢皮紙の七十六丁にて、殆んど全紙に亘つて細繪が書き入れられてゐる。

斯やうな裝訂裝飾の方面から書物に就て研究した本には、ポーラード（A, W, Pollard, Early Illustrated Books）及びハーバート（I. A. Herbert, Illuminated Manuscripts）などいふ人のものが極めて興味が深いものとして推賞出來る。

× × × ×

出版界の十年

——勞農ロシヤにおける——

山内房吉

一・書籍

最近十年間のロシヤの出版事業の發展を概觀するためには我々はこれを二期に分けて見ることが必要である。第一期は一九一七年の十月革命から一九二〇年に至る内亂時代で、この期間には見るべき出版は尠かつた。第二期は平和に歸つた建設時代のそれであつて、次のやうな數字を示してゐる。

	書日數	印刷部數
一九二一年	五、〇〇〇	二八、〇〇〇、〇〇〇
一九二二年	一一、〇〇〇	三七、〇〇〇、〇〇〇
一九二三年	一九、〇〇〇	六四、〇〇〇、〇〇〇
一九二四年	二九、〇〇〇	一〇九、〇〇〇、〇〇〇
一九二五年	三五、〇〇〇	一八〇、〇〇〇、〇〇〇

一九二六年には書日數の增年率は稍低減してゐる。といふのはこの年には既刊書の再版がかなり多數に上つたからである。しかしながら、右の統計を帝政時代のそれに比較すると、一九二五年には優に前者をしのいでゐるのである、即ち、

	書日數	印刷部數
一九一二年	三四、〇〇〇	一三三、〇〇〇、〇〇〇
一九二五年	三五、〇〇〇	一八〇、〇〇〇、〇〇〇

ところで、ソヴィエットにおけるこの數量的進歩は、事實はこの表以上である。何故ならこの世界大戰前のロシヤ統計はその中の五分の一以上がポーランド、フインランド等の分だからである。(現在それらは獨立してゐる。)從つて、現在のソヴィエット聯邦に相當する地域範圍における一九一二年の出版數は多くとも、二七、〇〇〇種、一〇六、〇〇〇、〇〇〇部以上ではなかつたと思はれるのである。

さらに、注意すべきことは、革命前のロシヤの出版物は主として有產階級と知識階級とに奉仕し、僅かに宗教的小說や封建的文學だけが「低級な」勞働者や農民のために生產されてゐたのであるが、ソヴィエットの出版事業は完全に勞働階級(勿論知識人をも含む)に身を獻げてゐるといふ點である。そこでは社會的、經濟的文獻が出版書目の第一位を占め、印刷部數の最高率を示してゐる。次に、各種の教科書が第二位を占め、それから通俗な科學書がこれに次ぎ、小說やその他の文藝物もかなりに多く、それと同じ位に兒童に關する書物と消費組合その他の協同事業に關する書籍が出版されてゐる。

二・新聞

定期刊行物は現に七百種の新聞が八百万部を出してゐる。これを世界大戰前の二百五十万乃至三百萬に比べて見ると如何に瀧甚な增加であるかゞ分る。この著しい數字的進歩は如何なる線に沿ふて行

はれてゐるか、そして、新聞は如何なる範疇に入るものであるか？次の數字がこの疑問に回答を與へる。一九二六年には、二百十二種の農民新聞と八十一種の勞働者新聞、六十三種の共産主義青年のための新聞、五十四種の一般新聞、十二種の勞働組合新聞、十三種の共同組合運動のための新聞、それから七十六種以上の混合的新聞といふ分類を示したのである。

この數字は甚だ重要である。一九二四年には農民新聞は發行總數凡そ五十萬部であつたが、一九二五年には急激に增大して百五十萬になり、一九二六年には殆んど二百萬部に達した、消費組合運動に關する新聞發行部數は一九二五年には僅かに九万に過ぎなかつたが、今では二十萬に及んでゐる。勞働者及び共産青年新聞は最近著しい變化を示さなくなつた。かくて、現在では、ソヴィエット・ロシヤの定期刊行物は漸く固定した數字を示して居り、除々にだが健全な發育へと進む傾向である。

三　雜　誌

雜誌の出版に關しては、次の統計的數字を示せば充分である。

戰前には雜誌の數は全國で千二百種を超えなかつた。現在では凡そ千四百種の雜誌が年に尠くとも一億三千萬部を發行する。

各國語で印刷される定期刊行雜誌の占める位置は重要であるが、それは最近著しい進歩を遂げた。その發行部數においても、またその分布狀態においても。現に、各國語によつて發行されてゐる新聞は二百種を超へ、雜誌も百種に達してゐる。これが僅か二年前にはこの半數の新聞雜誌しか存在しなかつたことを憶へば、その急激な發展は驚くべきものである。

これを要するに、ソヴィエット・ロシヤの出版事業は、內亂と飢饉と帝國主義諸國の經濟的封鎖を伴つた革命の後、十年を出でずして回復したばかりでなく、遙かに進步發展を遂げたのである。しかもそれは啻に數量的に發展したばかりでなく、質的に全く面目を一變したのである。この點に最も注目すべきである。社會狀態、政治經濟組織の變化は必然にその國の文化一般に影響を與へる。從つて出版物、出版事業の意義も變化さぜるを得ない。讀者大衆の層と質とが變れば、その要求も變らざるを得ないからである。この事實は我が國の著述家出版業者にも何等かの參考となるであらうと思ふ。これ私がこゝに一見、この出版年鑑には不適當と思はれるソヴヰエット・ロシヤの出版事業の一端を敢へて紹介する所以である。

× × ×

一九二七年中に出版された美術書

神原　泰

昨年この同じ年鑑に「美術書概評」を初めて書いて見て大体調子もわかつたので、今年こそ少しは自信のあるものを書けると娛しみにして居たら、急に劇團「進む劇場」を起したり、雜誌を發刊したりす

る事になつたのでゆつくりした氣持で美術書を讀んで居る心の餘裕がなくなつて了つた。そのため讀んだ本の數もひどく少く、讀み方も乱暴であつたから、あまり自信をもつてこの原稿は書けない。御詫びします。

×

私の愛讀おく能はなかつた好著「浮世繪と廢頽派」「江戸歌派雜考」を物した尾崎久彌氏は今年は同じく春陽堂から「浮世繪美人大首畫の研究」を出された。

私は――浮世繪に對して素人愛好者に過ぎない私は勿論大きな聲では云へないが――浮世繪の最高は美人大首畫にあるのではあるまいかと、いつも私かに考へて居るのであるから、尾崎氏が此の本を書き

「此の大首繪は、我らに、全身又は男女相偶の他の美人畫役者繪よりも、興味と感激は甚しいと思ふ。役者繪の方は、その時々その俳優の、とにかく箇性を捉へんとした（又はこれに成功した寫樂、國政の如き）努力が見え、即ち俳優各演技の大寫しの感じがあると同じく、美人畫大首は各畫家の美人畫製作心境――即ち彼らが主に創造せる「美人」の詐りなき、端的な曲型美に接しえられるからである。勿論各時代によつて多少の、今日の畫家がモデルを取扱ふと均しいやうな心持も動いてゐたらうが、よりて各一枚繪個々には多少の異同があらうが、その一畫家の製作の全部を通して、そこに彼ら畫家の希求した、寧ろ彼らの幻像、理想美であつたものが仄見えてゐるからである。」

と云はれたのは當然であると思ふ私の考では "Grandes Tetes"（大首繪）の項の中で

"Mais dans cette grandeur, la perfection de limpression est admirable, et le gaufrage, cette chose sipeu artistique chez nous, si artistique chez eux, mettant le blanc relief d'un chrysanthème ou d'un pétale de ceisier, sur une robe bleu ou mauve, le blanc relief d'un entrelac daus une bordure, joue le trompe-l'oeil d'un échantillon d'une robe de la-bas avec le ressaut de sa broderie"

と讃めたゴンクールすら、未だ大首繪の美しさに對して、餘りに敏感でなさすぎたと思つて居る。そのくらひに大首繪は吾々の心をとらへて居る。そして吾々は、尾崎氏がかゝる好著をなし、研究をなし、浮世繪の概念と題する解說をなした以外に百四十餘枚の代表的大首繪を選定復製せしめた勞苦を謝したい。

×

アルスは美術叢書を續けて今年は大隅爲三氏の「ギリシヤの藝術」川路柳虹氏の「コロー」高村光太郎氏の「ロダン」木村莊八氏の「廣重」を刊行した。

大隅爲三氏の「ギリシヤの藝術」は氏自らも「美術はギリシヤ民族の表現である。その美術を中心として神話や宗教の面影を傳へようとする。」

のをその本の目的だと云つて居られる通り、單に美術家と云ふよりは「美術的國民としてのギリシヤ人の生活」を巧みにも物語つた極めて興味深い物語である。

希臘先史時代の繪畫――美術上のデメテール――山頂市上の文豪ルナン――パルテノーン――美の女神アフロヂテー――希臘劇の假面――瓶器の繪畫とその製陶法――白色レキトスの繪畫と墓碑の彫刻――テルラコツタ人形。

と目次を並べただけでも此の本の眼目が何所にあるかは判るが、此の點に於て有名な博覽强記の氏の面目は遺憾なく發揮されて居る。

川路柳虹氏の「コロー」も私の愛讀した本の一つである。

一休私はコローが好きだ。

ピカソを通して示されたコロー（ピカソはコローから澤山滋養分を搾取して居る）もいゝけれど、最近の私には、コローのまゝのコローの方が更にいゝやうに思へ出した。

川路氏のコローは一面に於て非常に歷史的正確さをそなへて居るが、詩人である氏の筆はコローの得も云はれぬ詩情をよく傳へて居る。さあれ私には

「私を愛した、人の良いコロー、わたしもおまへを愛した、
曙がおぼろな光りに充ちてくるとき、
地平は朝の空氣に顫へてゐる。
畫家は立ちいでる——その時こそ彼の好ましい時なのだ……
彼が現はしたものは私なのだ。山毛欅の根元に坐り、
牧歌を奏ずる野の笛に思ひをくばるものは。
それは私だ、華奢なわたしの仲間の合唱に溶けて、
野の淸淨な王國で輕い律調に廻るのは。

私はよく知つてゐる。任事着をきたあの老人の善人を
芝草の片隅に畫架と畫筆をとり出す時、
その不思議な恍惚をなほ美しくするために
私はそこにゐた、董の勾ひに胸打ちながら
小鳥の歌に聞き恍けながら。（川路柳虹氏譯）

と歌つたコッペに更に强く心惹かれる。

高村光太郎氏の「ロダン」は名著である事には一點の疑もない。

アルスが初めて美術叢書を計劃した時、私にピカソの原稿を命じに來られた方は「有嶋生馬氏にセザンヌを、高村光太郎氏にロダンを賴むから」と話された。私はどんなに喜んで高村氏のロダンを期待した事だらう。どんなに興奮して、有嶋生馬氏のセザンヌや高村氏のロダンのやうな著著と材題との間に一分のギャップもない名著の間に伍して餘り恥かしくない物を書きたいと願つた事だつたらう。そして、私はその興奮の中に十二月二十九日から一月六日の晩迄、元日に半日休んだ以外は殆んど机を離れずに、一氣に「ピカソ」を書き終へて了つたのであつた。

その時から長い事私は「ロダン」を待つた。

そしてやつとの思ひで今年になつて、そのロダンを讀む事が出來た。

それは勿論名著だつた。ロダン論として世界に出しても、優に一流である。しかし私は何んとなく物足りなかつた。これでは如何にも高村氏である。これは定石の本である。實戰の本ではない。私は寂しかつた。

それに較べると木村莊八氏の廣重は樂々と讀ませる。そしてその畫の選擇――それは浮水畫房氏の手になるものと序にあるが――が廣く總括的であるのと、相當豐富な材料を手際よく料理して食べさせる莊八氏の腕の冴えには感心させられる。

×

アトリヱ社からは「デッサンの研究」と木村莊八氏の「ヴン・ゴオホの手紙」が出たが前者は「アトリヱ」誌上に掲載されたものを集めたものであるし、後者は再版、改版だから、批評しない。

アトリヱ社からは又今年中に「中村彝畫集」「安井曾太郎畫集」「マリー・ローランサン畫集」が出版された。

若くて苦しみ死んだ中村氏に對しては、昨年岩波書店が氏の遺稿を「藝術の無限感」と題して發刊して吳れた時私はこの出版年鑑の一九二七年版の中で

『私達の時代の美術家や美術に心を寄せて居た人で多少なりとも、中村氏に尊敬の念を持つて居ないものは殆んどないであらう。そして今その遺稿を讀んで涙なきを得ないし、「故人の遺稿を讀んでそれに感激し悅んで出版を應諾せられた」と云ふ岩波書店の好意にも、私達は感謝したい。』と云つた通り、氏は藝術を愛する人々にとつては、遺稿が發表されたのは、大變有難い事であるが、今又アトリヱ社が鶴田吉郎氏の序を添へて氏の主要作品の畫等を出版した事は、感謝に値する事である。

アトリヱ社は「安井曾太郎畫集」を發行して居る。

それは立派な自選畫集であるが、氏の如き未來を有つ人が、自選畫集を生前に出版するものは、如何なるものであらうか?

「マリー・ローランサン」は實にいゝ本だと思ふが、私自らの序を添へてあるのだから自畫自讃は差控える。

×

イデア書院からはウエーベル著柏良德三譯の「教育藝術の理論と實際」の上卷が出版された。

それは原名は「藝術教育と教育藝術」と云ふのだそうだが、それは柏良德三氏が序文で云つて居るやうに、

「これは彼自身が既に「序曲」の中で云つてゐる所であるが、從來の、又は今日の所謂藝術教育は、單に若干の藝術的な科目、例へば圖畫、唱歌、作文についてだけ行はれる教育であつて、他の大部分の科目は猶依然として、興味索莫たる、記憶偏重の教育法に據つてゐる。ウエーベルは此の點に少からぬ不滿と、教育的罪惡を感じ初めたらしい。彼が云ふ所によれば、眞の藝術教育は、單に若干の藝術的な科目についてはばかりでなく、小學校の全科目にわたつて、歷史、地理、理科は勿論として、算術、語し方、讀み方、書き方、手工、体操その他についても行はれなければならない。然うでなければ、全科目の學習は、結果、子供の生きた体驗となることが出來ず、眞に效果的であることは出來ない。そして此の書に於て、新らしい意味での其の藝術教育、眞の意味での藝術教育、云ひ換えれば教育藝術の理論と實際を示してゐるのである。」

この本の目的は「新圖畫教育論の提唱」をなした私の意見とは全然正反對になるものであるが、吾々を啓蒙する所甚大な好著でより、良譯である。

原著者は小學校の全科目を三つに分けて、第一部、材料媒介（歴史、地理、理科）第二部、藝術媒介（詩、造形藝術）、第三部、技術媒介、（讀み方、話し方、書き方、算術、唱歌、体操、手工、として居て、その第一部がこの上卷をなし、第二部、第三部及び附錄としての「子供と藝術」が譯されて下卷を爲すのださうであるから、美術書と云ふ範圍を限つて引受けて居る私は、下卷が出來てからこの名著を詳細と論評することにしたい。

×

溫故書屋からは「江漢西遊日記」が刊行された。

司馬江漢が日本の美術史上にしめる特異な地歩については今更ら喋々する迄もないが、この日記は實に赤裸々に彼の生活、彼の自負、彼の交遊、彼の人生に對する又は藝術に對する又は女に對する、世人に對する態度を物語つて居る。（江漢自身は「尤板行にはなり申さず」と云つて居る通り執筆の動機に世上流布の意味を含まないが故に猶更）

しかも最も興味ある三つの重要なる點は、（第一）今から百四十年も昔に銅版を始めた彼と、彼の時代の人達の知識程度と、時代を進み過ぎた彼が彼の同時代の人達に對する態度、及びその逆な場合が、露骨に物語られて居る點である。彼は多くの先驅者のやうに世人の壓迫も迫害もうけて居ない。

それは彼が自ら日記の中で

「廿三日天氣。畫を二三紙描く。酒肴を出し、兄弟不離して話しす。晩方裏口より出で、田畑を隔て蓮華寺と云あり。池あり、其提のほり、酒、茶、菓子等取よせ樂む。

廿四日天氣。暑を催しアッシ。おらんだ風の畫は蠟油を以て彩色をす、故に光澤ありて眞物の如しと云へければ、兄弟頻りに請故に描ん事を約す。然に府中に暫く滯留のうち、長崎の方へは參るまじとて蠟畫、其他地球の圖、其余蘭物、皆江戸へかえさんとて府中に置けり。飛脚を以て取よせんと云へければ、兄弟早く飛脚を遣し取よせる。爰より五里、往來十里なり、蠟畫パウリュスと云ふ半身の異人の像なり。髭のちり〳〵としたる處は誠に活るが如し。見物の者奇異の思ひをなす。亦地球の圖を以て世界の事を話す。聞く者此樣なるはなしは初めてなり。感心する。

廿五日天氣。蠟畫を描く。皆々膽つぶす。」

と云ふやうな人を人とも思はぬ態度を持つて居たからでもあらう。

彼はこの日記から見ると、單に一人の傑れた畫家であつたばかりでなく、仕事師でもあり、苦勞人でもあり、自慢屋でもあつたらしい。

彼はまた日記の他の所で

「曇りて後天氣、四時頃より北堀江兼葭堂へ參る。　吾が造る銅版兩國の圖を見せけるに誠に日本創製なりと云て感心する」

と云つて居るやうに、實に手に入つた宣傳家であつたらしい。

第二の點は彼の同時代の人はどんなに未開な狀態にあつたかと云ふ事である。

第三の點は、そして最大な美術史的興味のある點は、長崎へ畫修業の爲めに行つた彼が普通考へられて居るやうに長崎の修業後、畫人として進境したのでもなく、彼は期待に反して、長崎に於ては絶對に何等の研究も、師受もなかつたと云ふ事である。

長崎洋畫派の主領を、

「廿日雨天。鍛治屋町荒木爲之助といふ者の處へ行く、之は畫鑑定の役にて夫故、畫も少し畫くなり。一向の下手」

と一蹴し去つて居るあたり、彼の自負をよく示すと共に、後年彼が云つた

「小子崎陽に述て畫を作る者を求るに斷てなし」

とて失望を物語つて居る。

この點については、黑田源次氏が「司馬江漢西遊日記について」と題して、非常に明快な研究を附記して居る。この本は廣く一般に讀んでほしい本であるが、挿畫が多數に入つて居る爲相當の高價なのと五百部限定出版であるのが遺憾である。

×

中央美術者からは黑田重太郎氏の「油繪技法の變遷」、松林桂月氏の「田能村竹田」、矢野橋村氏の「浦上王堂」、中井宗太郎氏の「永德と山樂」が發刊された。

黑田重太郎氏の「油繪技法の變遷」は上卷だけであるが、その本は當然出す可きものが今迄出なかつたので、氏の努力は大いに賞讃に値する。

從來油繪の描き方とか素人の手引書とか云ふものはあつたが、油繪技法の研究はなかつた。氏のはこの研究の內歷史的變遷を叙したものである。

たゞ甚しく讀みづらく直譯くさいのが缺點である。

松林桂月氏は凡例の中で

「竹田翁の事蹟天下皆知る、此書別に翁を傳へんが爲にはあらず、只世間翁を以て之を專門家として其筆墨を批判するもの多きに由り、余は之を眞の文人畫家として見んとするもの、其筆墨の巧拙を論ぜんよりも、其筆墨の間に流露せる氣品、則ち作品を通じて見たる竹田の人格態度を讃美せんが爲めに筆を執れる者なることを記す。

と云つて居られるが、この本は單なる詩的讃美に止まらざるは

緒言——家系と少壯時代——苦諫と致仕——生活と人格——畫品と抱負——鑑識と畫論——書及び詩歌——交友と門人——著書——年譜

と云ふ目次だけでも、よくわかるが、就中「生活と人格」の稿の如きは、此種の畫集に珍らしい程詳細を極めて居て心持もよく出て居る。この本は非常によい本であるが、橋本關雪との論爭に興奮して書いて居るらしい所がほの見えるのはひが目か。

矢野橋村氏の「浦上王堂」はアルスの美術叢書が昨年出版した橋本關雪氏の「浦上王堂」と全然別箇な本になつて居る。

たゞ美術叢書のが四六版であつたのに反して矢野、橋村氏のは四六倍版である爲め復寫は問題にならない程まさつて居るが本文はどうとも云へない。

中井宗太郎氏の「永德と山樂」は好著である。

ことに永德と山樂は日本にはめづらしいモニュメンタルな作品を描き出した人達である。日本に稀に見る豪壯な、絢爛な畫を描いた人達である。この點で中井氏が

「かく考へると、桃山以前の我國文化、特に思想と藝術には一面の拘泥を蟬脫することが能きなかつた。こゝに日本國民は、過古の規範と傳承を脫離して、まさに跳躍すべき時期に逢着したのである。

かくて出現したのは桃山時代であり。蓋世の英傑太閤秀吉、藝術の名匠狩野永德、山樂にこの意味の表徴を見るのである。

桃山時代に於て、私達は始めて鬱陶しい夜の帳を切りおとして、白日のものに明快自由にして、しかも眞に自己に歸るの天地に出ずるを感ずる、こゝに國家は自由に大膽に、何の拘束もなく思ふがまゝに躍動し、剛健なる中に豪華、雄麗なる時代精神を形づくつたのである。

この時代精神に至高の藝術表現を與へたのは卽ち永德、山樂の二名匠であつた。」

と云つたのは至言である。ことに中井氏が

「わが國民國有の心情は、佛教に見る陰慘な退嬰的、出世的な、また虛無恬淡な性情ではなかつた。寧ろ明快な躍動的に現實の世界に悅樂を求むる剛健な國民であり、人間を自然に生きる朗らかな心情の持主であつた。」

と見たのは私の心からの同感する所であつて

「私はこゝに國民固有の心情が、朗らかに明るく剛健な中に典雅な心持に生きた姿を認めるのである。これが支那思想特に佛教のために彼岸の憧憬となり、涅槃の欣求となり、陰鬱なる陰影を植えつけられ、强く現實に生きんとする意慾を鎖磨したのであらう。

しかるに桃山時代に到ると、人々は永き囚はれの中から解放せられて、自己の中に目覺め過古の闇影を振ひ落して雄々しくも自由の道を歩まうとし、こゝに國民は固有の心情に目覺めて清朗なる心に、自然と人生とをまともに觀照しやうとする。特に國土の雄大と文化の優秀とを以て、常に我國を威壓せし支那をも征伏しやうとし、意力の赴くがまゝに四方に進展し、或は外國交易に海外の交通を拓き、內には土木を興して豪莊な城廓邸宅建築に豪華な障壁畫を描いて文化を誇らうとする。桃山時代はわが國に於けるルネツサンスとも云ふべきである。

人間の自覺獨立を意味するルネツサンスの藝術は、私達はこれを永德、山樂の作品に見るのである。こゝに永く影響を留めた佛教思想の影は消えて跡なく、たゞ人間の眼に完美を悅ばしむる純粹な美的觀照を見るのである。佛教に役立つ分前を持たずに、信仰に關與する所なく、城廓邸宅の襖或は屛風に描いて、甘美を求むる心に應じ、高雅な享樂を滿たして裝飾の美を輝やかす。

自然の觀照に目覺めたのみならず、その技巧に於ても、傳承の拘束を避けて、これを融合離脫し、自然の直接な感激に出發しやうとするのである。これ等の點は後に審かに說述することとし、次にはまづ、技巧形式に關して、之を歷史的に考察し、この二名匠の藝術的意義を明にしたい。」

と云はれた中井氏の態度に心からの同意を表するものである。

私はこの名著とこの二人の藝術家の豪宕な、華麗な、雄渾な絢爛な藝術とを、吾々現代の青年の注意にすゝめたい。

岩波書店はジムナル著、大西克禮譯の「レムブラント」大西克禮民の「現代美學の問題」、ヒルデブラント著、淸水淸氏譯の「造形美術に於ける形式の問題」とを發行した。

この本はレンブラントと云ふ吾々の尊敬する、そして極めて特異なる性格と天分と生涯とを持つた一人の畵家に對する傳記的研究ではなくて、レンブラントの藝術現象について哲學的探求をしようと云ふのである。

そしてこの點に於て哲學、社會學、美學等に於て多大な業績を發表して居られるジムナルがレンブ

ラントを一つのモティーフとしてした哲學的研究は甚しい興味をそゝるものである。

そしてことに第一章の「精神的內容の表出」の如き、ジムナルの意見に贊成するとしないととに拘らず、吾々を啓發すな所甚大である。

大西克禮氏の「現代美學の問題」は立派な美學の本である。

然しながら、吾々はこう云ふ「美學」の本のみを持つ可きであらうか？

私は思ふ。こう云つた完成されたブルヂュア美學と相對するプロレタリアの美學は生れなければならないと。プロレタリアの實證美學は生れなければならないと。

私達新しいプロレタリアの實證美學を確立せんとして居る者にとつては、大西氏の「現代美學の問題」は有益ではあつたが、物足りない所も多いのは如何ともし得ない。

ヒルデブラントの「造形美術に於ける形式の問題」は驚く可き本である。

勿論凡ての美術家は、意識的にも無意識にも絶えず造形美術に於ける形式の問題に悶み續けて居る。

ことに未來派、立体派の誕生以後この問題は甚しく吾々の考慮の重要部分となり、現に吾々もしばしば之の問題を取扱つた。

しかしヒルデンブラントが身自ら彫刻家でありながら、少しの神秘的ニュアンスもまじえず純粋に合理的立場に固着しながら論理の歩を合理的に進めて居る態度は、吾々に教へる所甚大であつた。

勿論私達はこの本の主張に對して澤山の異論を出すべき地歩にある。それにも拘らず藝術に、超合理的神秘性を認めて「藝術の爲めの藝術」の冒す可からざる迷信に落入つて居る從來の美術書の全然持つて居ない立派な新時代的態度を採つて居る著者に對し絶大な讃辭を呈するに躊躇しない。（完）

出版文化の印象

武藤直治

現在のわが出版社會の最も著しい傾向といへば、いはゆる一圓本の流行である。一昨年末から現在（一九二八年六月）にかけていはゆる一圓本の豫約出版物の種類は、實に數へきれない程多く、しかも現在も續々新しいものの發表がある。これらを通じて私たちは、現在の出版社會が一大轉換期にあることを推察せずにはゐられない。即ち當業社界もまた他の企業と同じく、資本の集中と大量生産化の過程を辿りつゝあるのである。大資本を投下した企業には、時として襲ふ恐慌やパニックを避けることが出來ないし、またそれらのたびごとに資本の集中化をも避けがたい。いはゆる、圓本全集の混戰を通じて、いよ〳〵これらの新しい狀態は明かになつてくる。いひ換へるならば、封建時代的の小企業から、新しい自由競爭の舞台へ乘出してきたのである。

出版物の大量生産は、その社會的効果からへば、現代の精神文化の一般社會への浸潤を齎す結果となるに相違ない。書物が日常の生活必需品として、一般社會人に需用される日が近づいて來る。しかし現在は、いはゆる圓本が讀まれるよりは飾られ、貯へられるために出版され、購求されてゐる觀がある。それには豫約出版といふ不便な形式が悪いのでもあらう、さらに進んで、一般社會人が、何時なりとも欲する時に、欲する書物が最も廉價で、しかも最も手近かな方法で手に入いるやうになれば、尨大な書齋や書庫はもちろん、圖書館さへも必要の機會がへつてくるだらう。私たちの手近に小さな書柵でも一つあればそれでよくなる。

かつて私たちの知つてる頃でも、一枚の櫛や鏡、または一挺の刄をすら親から子に、母から娘に傳へて大切にしてゐた時代があつたのに、今ではさうした一切の什器類を誰もが自由に使ひ棄てゝ一向

怪しまない。書物をもまた欲する時に欲する書物が直ちに手に入れば、私たちは極めて僅かの研究用のテキスト以外には藏書の必要がなくなる。印刷用紙その他の生産がもつと〳〵廉價に大量生産されるならば、書物一冊の價は、もつと〳〵安くなる筈だ。すでに圓本や廉價版の出現は、書物を使ひ棄ての消費物としての時代の來ることを暗示してるやうである。すでに雜誌新聞はさうなつてゐる。次には書物だ。

×　×　×

前年(一九二七年)度の出版物の中で、マルキシズムとレーニニズムに關するパンフレツド類の數は特に著しい、本年度に及んで「資本論」及び二種類のマルクス・エンゲルス全集の豫約出版があるが、これらが豫約出版物として立派に成績を擧げてゆくところに一般讀書階級の趨勢の一端を見ることが出來る。しかし社會科學に關する著述では、今もつて纒つたものは余り多くない。この種類の新らしい著作がもつと要求されてもよいと思ふ。

自然科學に關する著述も多くない。專門的な研究書は見かける。たゞよい意味での通俗書が甚だ乏しい。いはゆる通俗科學の書物は、科學について何ものをも教へることをしないものがあるやうだ。最も妥當な內容を平易に敍述することは、立派な技術に相違ない。

いはゆる圓本の中には、內外の文藝、演劇の名著類を殆ど網羅したせいか、文藝、演劇の出版が、その一時に比べて微々としてふるはない。たゞ專門的の研究書類に、纒つたものに二、三出てゐる。とにかく、文藝物の讀者の若干が社會科學やマルキシズムの興味に轉じて行つたことは明かである。

一時は吉利支丹研究に關する書籍が一部の興味をひいたが、すでに過去となつて、鄕土及び民俗研究がこれに代つてゐる。けれども、日本あるひは東洋の歷史に關する、新しい立場からの研究がもつと注目をひいてもよいやうに思はれる。社會史、文化史などの新しい方法をもつてする研究が、もつと盛んになつてもよいやうに思はれる。

以上、重に本年度出版年鑑の總目錄を見て、感じたことである。（完）

昭和三年六月十日印刷
昭和三年六月十五日發行
昭和三年七月十三日

定價金八十錢

編者　中泉春男

發行者　東京市芝區白金三光町三四二　中泉春男

印刷者　東京市京橋鎗屋町一一　信毎印刷所　西澤圭

發行所　東京市芝區白金三光町坪巷一　京七二二二二番　國際思潮研究會

不許複製

家庭必讀

國民新聞

資本金參百萬圓

一刻も手放せぬ
正確速報の定評ある
政治に經濟に！
家庭の讀物として
最も趣味豐富なる
國民新聞

基督教名著集

Ⅰ ハルナック 基督教の本質

山谷省吾譯

¥2.80

ハルナック博士の快明深奥なる批評眼鑑賞眼によつて基督教の本質は吾等の前に提供されました。宗教問題に親れたい人はこの名譯を色讀されんを

Ⅱ オットー 聖なるもの

山谷省吾譯

¥3.00

内容の第一部は『神觀念』に於ける『非合理的要素』の指示確定し且つその合理的要素との關係を明かにせんとして居ります。第二部に於てはこの『聖なるもの』が宗教史上に如何に表現されて居るかを第三の部分として『聖なるもの』の宗教哲學的觀察に入つて居ります。

Ⅲ ヒルティー 宗教論文集 上

黑崎幸吉譯

¥2.80

カール・ヒルティー博士は牧師神學者に非ずしてスヰスの法律學者である。而もその專門外の宗教倫理的方面に於ては世界的の聖者偉人として崇められ、其感化は歐米は勿論極東の日本に迄も及び、譯者自身も亦彼に感謝の念禁ずる能はざる一人である。

Ⅲ ヒルティー 宗教論文集 下

山田幸三郎譯

¥2.80

譯者は自序にヒルティー博士の著書を讀んで述べてゐます。『私の著述を讀んでくれた最も親しき友等よ私は死んでゆく。しかし間もなく他の生命に於いて再び喜ばしく君等に會ふことを望む』との一語を長き病床生活の間に讀んだ時には靜かな涙が頰に傳つたことを告白する

發兌 東京市牛込區山伏町四十 イデアアデイ書院 振替東京一五四二三 電話牛込三六三五六

培風館

東京市神田區錦町三丁目
電話神田三七七四番
振替東京三二六一七番

書名	著譯者	型頁	定價	送料
日本民族の將來	田中寛一	四六二八〇	二・三〇	二・八
物質構造論	福田光治	菊三〇四	四・五〇	二・八
童話及兒童の研究	松村武雄	菊五八六	四・八〇	二・六
機能心理學	大伴茂 武政太郎	菊三四四	三・六〇	二・四
數學教授の新思潮	黑田稔	菊四一〇	四・五〇	二・六
直觀幾何 教授の理論と實際	國東九郎	菊四一〇	三・八〇	二・六
無機化學要論	石川清一	菊三五八	三・八〇	二・七
有機化學要論	石川清一	菊三九六	三・八〇	二・七
學校體操の性理的研究	佐々木小山長助等	菊四五〇	四・五〇	二・七
日本教育思想史の研究	和魂漢才說 加藤仁平	菊三五四	三・八〇	二・六
新手工科教材及教授法	岡山秀吉	菊三〇五	二・八〇	二・八

書名	著譯者	型頁	定價	送料
高等小學校手工料新指導	阿部七五三吉	菊三三三	二・九〇	二・二
色テープ細工の理論と實際	佐藤平太郎	菊三五五	三・八〇	二・六
糸鋸機械による切貫及木象嵌法	松平義人	菊二七三	二・八〇	二・二
兒童教育と兒童文藝	松村武雄	四六三〇	三・二〇	二・二
兒童創作意識の發達と綴方の新指導	飯田恒作	四六四七	三・三〇	二・二
自由人となるまで	川村理助	四六三六	一・八〇	二・〇八
體驗生活	川村理助	四六三四	二・二〇	二・二
平和の心境	川村理助	四六三三	二・二〇	二・一八
日本童話	森鷗外・松村武雄・鈴木三重吉・馬淵冷佑	四六上下一九〇	各六〇	各一・八〇
日本傳說	森鷗外・松村武雄・鈴木三重吉・馬淵冷佑	四六上下二〇〇	各六〇	各一・八〇
日本神話	森鷗外・松村武雄・鈴木三重吉・馬淵冷佑	四六上下一九八	各六〇	各一・八〇
少年太平記	野手矢貞三	菊上下三〇〇		

文求堂書店

東京市本郷區臺町五三番
電話小石川四八〇番
振替東京二一八番

書名	著譯者	型冊數	定價	送料
支那聲音字彙	岡本正文編	三六一	一・二〇	一・四
支那語辭彙	石山福治編纂	三六一	三・〇〇	一・八
支那語大辭彙	石山福治編纂	四六一	六・〇〇	二・四
日支小辭彙	石山福治編纂	三六一	二・〇〇	一・六
日支大辭彙	石山福治編著	四六一	一〇・〇〇	五・六
官話指南	鄭永邦 吳啓太 共著 金國璞 改訂	四六一	一・八〇	一・二〇
官話指南總譯	吳泰壽譯	菊一	一・八〇	一・二〇
支那語助辭用法	青柳篤恒	四六一	一・二〇	一・六
支那語動字用法	張廷彥	四六一	一・二〇	一・六
日華新會話	石山福治	三六一	一・二〇	一・六
支那語獨習全書	石山福治	四六一	二・八〇	二・二〇
支那笑話新編	矢野藤助編譯	四六一	一・八〇	一・四

書名	著譯者	型冊數	定價	送料
支那童話集	矢野藤助編譯	四六一	一・八〇	一・四
支那長篇小說 選鈔	神谷衝平選解	四六一	一・八〇	一・四
支那短篇小說 選萃	神谷衝平選解	四六一	一・八〇	一・四
中國商業用文 附譯解	宮錦舒著 田中慶太郎譯	四六一	一・八〇	一・四
現代支那書翰文例解	石山福治編著	四六一	二・五〇	二・二〇
和漢洋年契	河村貞山	四六一倍	一・五〇	一・六
王注老子	魏王弼注 唐陸德明音義	菊一	一・四	七〇
唐詩選	李攀龍編	四六一	一・八〇	一・六
十八史略讀本	元曾先之編	菊二	二・〇〇	二・〇〇
文章軌範	謝枋得	菊一	一・〇〇	一・八
四書白文		四六三	一・五〇	一・二〇
周易王注	仿宋本	菊倍三	一五・〇〇	

文藝社

東京牛込新小川町二ノ四
振替 東京 二一一〇二番

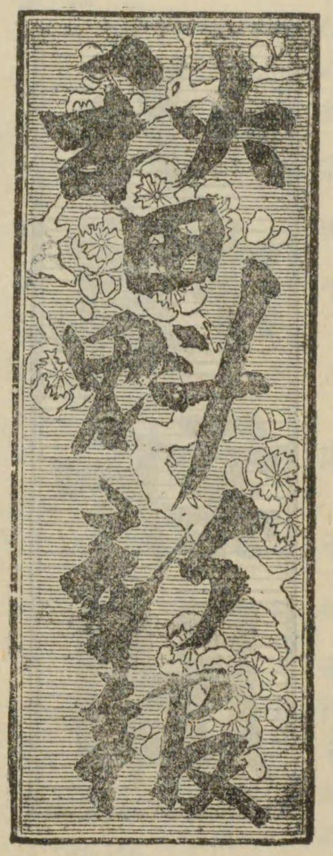
書名	著者	定價
釋迦の生涯と思想	小林鶯里	一・五〇
大楠公	同	一・三〇
文章報國	同	一・三〇
文章三百六十五日	同	一・三〇
俳趣情景	同	一・三〇
新撰作文叢書	小林鶯里	
(1)新撰書簡文	同	・六〇
(2)口語体書簡文	同	・六〇
(3)美文精選	同	・六〇
作文の考へ方と模範答案	小林操	一・二〇
警鐘の亂打	小林鶯里	一・五〇
鈴蘭の歌へる	小林操 小林綾子	一・二〇
若人の胸へ	同	一・五〇
鶯里隨筆	小林鶯里	一・五〇
結婚魔	同	一・五〇
イブとその子達	同	二・〇〇
詩集 兵隊	大鹿卓	一・五〇
諷刺と偶意の社會相	小林鶯里	一・二〇
文部省認定 國民生活	同	一・二〇
眞田の智謀	同	一・二〇
赤穂義士 上卷	同	一・二〇
同 中卷	同	一・二〇
同 下卷	同	一・二〇
(1)傳說の世界	同	・六〇
興亡五千年史	小林鶯里	
(2)文明の誕生	小林鶯里	・六〇
(3)アテネ・スパルタ時代	同	・六〇
(4)ギリシヤの文明	同	・六〇
(5)キリストの出現	同	・六〇
(6)フランスの建國	同	・六〇
(7)アラビヤの勃興	同	・六〇
(8)土耳古の盛衰	同	・六〇
(9)宗教革改時代	同	・六〇
(10)ルイ全盛期	同	・六〇
(11)亞米利加發見	同	・六〇
(12)英國の議院政治	同	・六〇
日本國民史	小林鶯里	
(1)建國より平安朝へ	小林鶯里	・六〇
(2)源家と平家	同	・六〇
(3)鎌倉幕府時代	同	・六〇
(4)吉野を護る人々	同	・六〇
(5)建武の中興	同	・六〇
(6)勤王の輩出	同	・六〇
(7)足利幕府の建設	同	・六〇
近松傑作集	近松巢林子	
(1)心中天の網島	同	・六〇
(2)曾根崎心中 津國女夫池	同	・六〇
講話名作集	文藝社編輯部	一・二〇
講談精選	同	一・二〇

小林鶯里著 **國民叢書**

各冊四十錢
送料四錢

1 新しき修養
2 宗教早わかり
3 立志より成功への近道
4 國民としての常識
5 新聞を讀む基礎の知識
6 經濟學の知識
7 日常科學の話
8 偉人の修養
9 哲學早わかり
10 新しき年中行事
11 藝術の話
12 思想善導
13 文化生活の基調
14 青年の進むべき道
15 論理學早わかり
16 野球の話
17 斯の如き人は成功する
18 心理學の話
19 婦人の進むべき道
20 理想の家庭
21 教育學の話
22 倫理學の話
23 平凡道德
24 精神修養
25 向上發展の基礎
26 佛陀の福音
27 基督の福音
28 無線電話早わかり
29 無線電話の知識
30 世界の格言と警句
31 家庭科學の話
32 普通選擧の話
33 政黨早わかり
34 音樂の知識
35 貯金のすゝめ
36 公民としての心得
37 成人教育の話
38 農村發展の基礎
39 日本地理の知識
40 全國名所めぐり
41 萬有科學の知識
42 自然科學の進化
43 科學萬能の世界
44 宇宙の秘密
45 陸軍の知識
46 日本歷史の知識
47 東洋歷史の知識
49 日本歷史年表
50 明治大正の事蹟
51 今日の歷史
55 實修商業簿記

東京牛込區新小川町二ノ四
文藝社
振替東京二〇一一二番



社會文藝叢書

◇四六判假裝・價各八十五錢◇

8 プリンス・ハアゲン（戲曲）シンクレヤア　佐野碩譯

「調べた藝術」の創始者として昨今頻りに紹介されてゐる人の代表的なもので、前衞座の第二回上演臺本として嚴重なる推敲を經た五幕戲曲。

9 鼠陷し（戲曲）イレーツキイ　工藤信譯

現代ロシヤ作家としては未だ不遇にあるが、その着眼の奇拔なのと、思想の透徹とは、勞農政府をも辛竦に痛罵して完膚なき戲曲である。

10 新しき改宗（戲曲）ステブニヤツク　山内房吉譯

原作者は作家としてよりも、寧ろテロリストとして有名である。猛烈なテロリスト。それの手になる作品。それだけでも一讀に價しよう。

11 惡指導者（戲曲）ミルボオ　石川三四郎譯

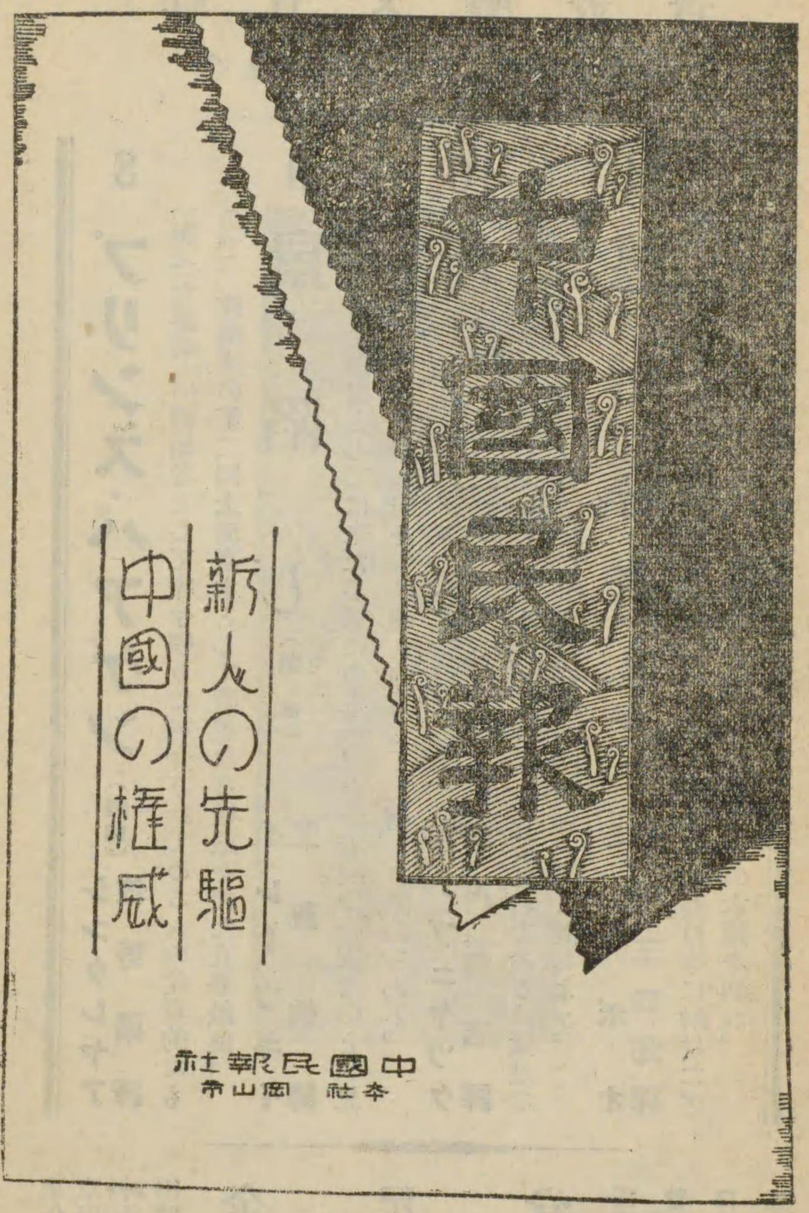
惡指導者！――その名は今やボルシエヴイキイの中央委員等に附けたアザ名である。眞の無產者は本書によつて、惡指導者の本體を知れ。

東京市神田小川町　今路　金星堂　振替口座東京三三二八

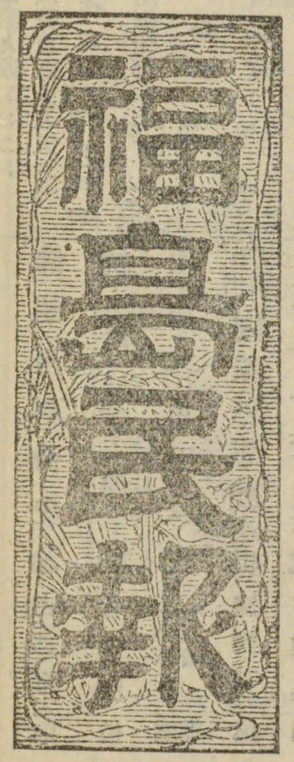
巖松堂書店

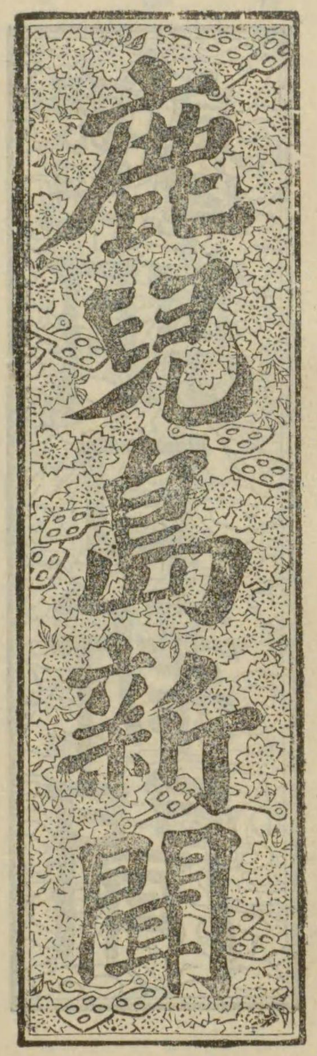
神田・中猿樂・二二二六一
電話九段二六七六
振替東京六五五六

書名	著譯者	型	頁數	定價	送料
出版關係法令集	巖松堂編輯部	四六	一三〇	一・〇〇	六
米國新聞業の研究	棟尾松治	四六	三六八	二・五〇	一三
勞働行政綱要	河原田稼吉	菊	五三〇	四・五〇	一八
犯罪と科學の鬪爭	安東禾村	四六	三六八	二・〇〇	一三
刑事訴訟法大綱	板倉松太郎	菊	三三	二・八〇	一八
日本親族法論	牧野菊之助	菊	四九四	四・五〇	一八
日本相續法論	牧野菊之助	菊	四八〇	四・五〇	一八
改訂增補 商法論綱	柳川勝二	菊	八八〇	七・五〇	二四
會社法講義	松本蒸二	菊	四七五	四・五〇	一八
手形法論	矢部克巳	菊	四一八	三・五〇	一八
日本海法史	住田正一	菊	四六二	四・〇〇	一八
新訂 民事訴訟法綱要	板倉松太郎	菊	六八四	六・〇〇	二四
マルクスの支那印度論	小林良正	四六	一四〇	一・六〇	六
佛蘭西革命史論	占部百太郎	菊	三八六	三・〇〇	一八
統計學原論	竹下清松	菊	三三七	三・〇〇	一八
明治大正財政史	小林丑三郎 北崎進	菊	四五四	四・〇〇	一八
文化史觀 國際思想發達史	淺野利三郎	菊	四七二	三・八〇	一八
近世 東洋外交史序說	齋藤良衛	菊	五〇九	四・〇〇	一八
レーニンの生涯と學說	田所輝明譯	四六	一六二	一・八〇	六
廣告學概論	松宮三郎	菊	三三〇	三・〇〇	一八
例解 原價計算	魚谷傳太郎	菊	三三一	二・五〇	一八
テンニース 共同社會と利益社會	井森陸平譯	菊	二九一	三・三〇	一八
農村社會史論講	小野武夫	菊	三三七	二・八〇	一八
各國法制上より見たる 勞働團結の自由	國際勞働局	菊	二〇八	一・八〇	一三
コール氏著 英國勞働階級運動略史	荻原隆吉譯	菊	二三四	二・〇〇	一二
失業問題と救濟施設	緒方庸雄	菊	二九六	二・五〇	一八



河北新報





鹿兒島市山下町
鹿兒島新聞社

愛人の一語　丈夫の心を動かし

信用ある新聞の一句　大衆を動かす

印刷屋より出版業者へ

著者の秀でたる言葉が、そのまゝに、美しく、鮮かに、盛られてあるのが良書である。

それは印刷の力に依るべきで、用紙や裝幀は單なる化粧である。

印刷に注意を拂はれてない良書は無い。

（東京芝浦　單式印刷株式會社）

特許單式印刷の工程

單式印刷では活字から印刷しません。

先づ印刷すべき形式に由り、それぞれの割り付けをしました原稿を（例へば五號何字詰何行とか、八ポイント四分アキ何字詰何行とか、ルビ付とか、それぞれの形）タイプライターを以て白紙へ印字します。こうして出來たものを原紙と稱してゐます。（此方法のために三十餘種の特許と實用新案とを所有してゐます）この原紙の間に校正を了し、鮮麗でない文字を一本づゝやり直しまして印影を丁寧に精撰します。そして之を寫眞に撮ります。この場合多くは縮寫します。之は活字の缺點（如何なる新鑄活字でも多くの缺點は免れません）を縮寫して見へ無くするためと、又一つには、何號でも任意の大さの文字を得らるゝからであります。寫眞はジンク板へ燒付けられ、そのジンク板からオフセット印刷機で印刷せられます、故に如何なるザラ紙にでも鮮明に印刷せられるのであります。

この様な工程上の利益として、文章中に挿入せられる圖版は、活版印刷の如く、別様に版を造り活字と合せて印刷する事をしませんで、下繪を原紙と共に寫眞しまして、文字と圖とを同一個の版にしてしまひますから、別に版代が要りません。

この故に、單式印刷は鮮麗である計りでなく、至極經濟的であります。

東京芝浦

單式印刷株式會社

（特許　單式印刷）

現代知識の寶庫

昭和三年
朝日年鑑

七大特色

◇内容＝豐富　記事＝正確　便覽＝有益
定價＝至廉　寫眞＝華麗　印刷＝鮮明
製本＝堅固

一大附錄添付

◇普通選擧心得

本書は普選の實施について知つておくべき要領を判り易く編めたもので各人必携の普選法の手引書であります

四六判四十八頁色表紙綴別冊

四六判約八百頁グラビアヴ寫眞十六頁
定價八十錢（送料十二錢）

◇日常座右の寶典◇

大阪◇朝日新聞社◇東京

全國朝日新聞販賣店及店書名有あり品切れの節は本社へ

振替（大阪五五〇番）（東京一七三〇番）

エ18S20

アルス美術叢書

見よ！東西美術の一大殿堂

普及版出づ

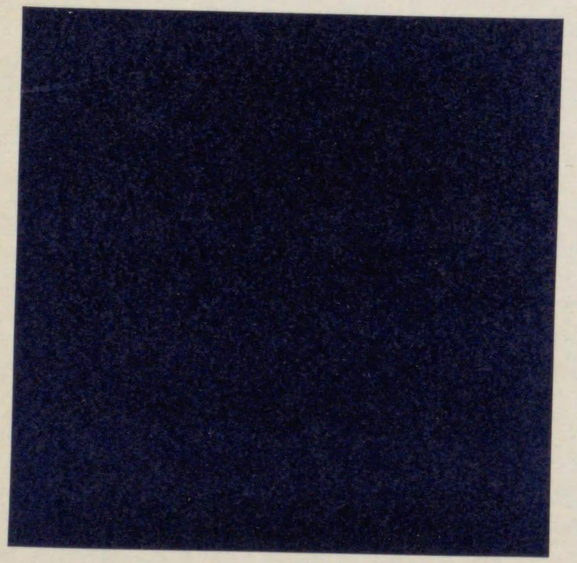
第一期刊行

古今東西を通ずる巨匠の完全なる畫集、評傳として本叢書は美術界空前の一大體系をなすものである。今回左の十篇を選び第一期普及版の刊行を斷行することゝした。毎卷百餘頁に亘る評傳は六十數葉の別刷口繪及び光彩陸離たる原色版と共に巨匠の藝術と生涯とを傳へて遺憾がない。廉價版の出現こそは美術研究家、鑑賞家、愛好者にとつて實に一大福音といはねばならぬ。敢て江湖に薦むる所以である。

一冊 壹圓

セザンヌ・有島生馬著
寫樂・仲田勝之助著
ゴオホ・中川一政著
大雅堂・小杉未醒著
ゴーガン・山崎省三著
マチス・正宗得三郎著
北齋・織川一磨著
ミレー・相良德三著
廣重・木村莊八著
ロダン・高村光太郎著

最も完全なる畫集にして評傳

定價一圓 送料八錢

アルス
東京表 小石川九〇一
電話 小石川二四四八八八〇
振替 東京三一八四五七一三番